社会人が送る、
二度目の学生生活
TrymenT
脚色 えある
原作 TrymenT
I
TrymenT

TrymenT

今を変えたいと願うあなたへ

YoU KnowS ThE DeaR KnowS

I

TrymenT CharacteR RolL

登場人物名簿

なつき　ふみ
夏杞文実

かわい　おりつる
河居織鶴

ほしの
星乃あやめ

きば　まさあき
喜羽正明

きみしま　かける
君島　翔

TrymenT CharacteR RolL

ユウ

八馬 奏（はちま かなで）

二上響子（ふたかみ きょうこ）

伊砂 真（いすか まこと）

三国義貴（みくに よしたか）

今を変えたいと願うあなたへ

——今を変えたいと願うあなたへ。

そう銘打たれたキャッチコピーに、とある少女が目を留めた。ともすれば新興宗教の勧誘のようなそれは、とある計画への参加を促すパンフレット。

今を変えたい。

その思いは、きっとありふれたものなのだろう。

自分の人生に満足している人間なんていうのは、きっと四つ葉のクローバーより希少種だ。パンフレットを手にした少女にとってもそれは同じで、思わず彼女はその中身へと目を通す。

……人は、生きていくほどに大切なものが増えていく。

友人、恋人、経験、財産。あるいはそこに、失恋や挫折も含まれているかもしれない。人によっては、プライドや名誉なんていうものもあるだろう。

今を変える。新しい人生を歩む。

そんな美辞麗句をただ口にするのと同じくらい、その困難さを想像するのも容易い話。

――簡単に、「勇気」と人は言うけれど。
踏み出した一歩の先に、いったい何があるのだろう。そんな不安は、よく分かる。
けれど、忘れてはいけないことがもうひとつ。
変わるということは、今の自分から何かを捨てる必要があるということ。
当然ながら、捨てなければならないものが自分にとって大切なほど、その難易度は跳ね上がる。
例えば、プロ野球選手になれなかった甲子園球児。
例えば、メジャーデビューできなかった有名バンド。
例えば、忘れ去られた一発屋芸人。
取り戻したいわけではない。やり直したいわけでもない。
それでも年齢が、環境が、段々とそれを許さなくなっていく。昔は楽しめていたものが、いつしか生き方そのものとなり、その果てについに行き場を失っていく。今更それを「変えろ」というのは、きっと美辞や麗句ではありえない。
「……」
少女の目がパンフレットの中身を追いかけていく。自らの、決して豊富とは言えないその体験と重ねていく。

――今を変えたいと願うあなたへ。

自身に向けられたそのキャッチコピーに、少女はカメラと文具の入ったバッグを肩にかけなおしながら思う。

今の自分を終わらせて、その先へと踏み出すために。

試してみるんだ、もう一度――と。

・・・

四月四日。

明け方の空の下を、船は進んでいた。

定員千二百名の大型客船のデッキに、まばらに集まった人達。

両手を広げて伸びをする者もいれば、互いに写真を撮り合う者もいる。

朝日の下で談笑の声が、波音と混ざり合っていた。

……その中に、少女はいた。

ショートヘアの黒髪に、中性的な、ともすれば男の子とも間違えられそうな顔立ちの（きみしまかける）少女。

名を、君島翔という。
海風に乱された前髪も気にせず、その視線はコンパクトデジタルカメラの液晶に注がれている。

Alpha

そのまま進行方向の遠方に浮かぶ島にフォーカスを合わせ、何度かシャッターを切っていく。
ボタンを押すたび、響き渡る電子のシャッター音。
それが幾度か続いた後、翔はカメラをおろし、早速撮った写真を確認。声を出さずに満足げに微笑んだ。
両足を肩幅に開き、波に揺れる船体とのバランスを取りながら、翔は一枚一枚たんねんに確認する。
次の一枚、その次の一枚……。
楽しげな表情。けれどしばらくそうしたあとで翔が視線を前方の島に戻したとき、その表情からはフッと笑顔は消えていた。
目の前の柵に手をかけてほんの小さくえずいたあと、ずるずるとうずくまっていく。
「やっぱ……だめだこりゃ」
三半規管の大暴走。
ありていに言えば、船酔いだった。

・
・
・

「この度は、当船をご利用いただきまして誠にありがとうございます。当船は、まもなく御雲島に到着致します。ただいま、船内二階搭乗口付近にて――」

船内アナウンスが響く廊下。

搭乗客は、次々とデッキに向かっていた。

その中で一人、壁に手をつき足を引きずりながら、翔だけは逆方向に――つまりは客室方向へと歩いていく。

「くっそ……気持ち、悪い……」

壁に身を預けるようにしてゆっくりと。

下船時刻が迫る。そんな中立ち止まった翔が、ゆっくり顔を上げた。

「あ……」

「……」

――視線の先に、車椅子に座った搭乗客がいた。

翔と同じ年かやや下くらいの、亜麻色のストレートヘアを背中に流した少女。

一瞬目が合ったものの、その搭乗客はすぐに目を逸らす。そのまま、船員がゆっくりと車椅子を押していった。

「あの子……」
翔は肩で息をしながら、通り過ぎていく車椅子の搭乗客を目で追う。
一方、車椅子の搭乗客は窓越しに外を眺めたまま、最後まで翔のほうを振り返らなかった。
「……。ああっと、とにかく私も、急がないと……」
ほどなくして船が目的地に着き、続々と人が降りていく。
船着き場に集められた搭乗客は数百人。
なんとか間に合った翔があたりを見渡すと、そこには先ほどの車椅子の搭乗客の姿もあった。
……下船の流れが落ち着いた頃、アイロンがかかったスーツに身を包んだ女性スタッフが、落ち着いた声で案内を始める。
「みなさん、長旅お疲れさまでした。中には船酔いが酷い方もいらっしゃるでしょうから、詳細な説明は自由時間を挟んで、夕方十七時に改めて執り行いたいと思います。事前説明があったように、各自寮部屋が用意されています。まずは、自室を確認して、みなさんが持って来られた荷物を運んでください。相部屋になりますので、時間まで――」
翔は説明を聞き流しながら、車椅子の搭乗客の様子を眺める。

目当ての相手は、集団の端で手慰みをしながら説明を聞いていた。落ち着きのない手の動き。話を聞いていないわけでもなさそうだが、かといって集中しているとは思えないその様子。
　その落ち着きのない仕草をぼんやり眺めている間に、スーツの女性はあっさりとその説明を終えていた。

・　・　・

――トライメント計画。
　島に集められた乗船客は、みなその計画の参加者、あるいは関係者だ。
　計画と言っても何か秘密裏に事を為そうというわけではなく、その主たる内容は若年者の社会復帰に対する支援事業とでもいうべきもの。
　学園生活をもう一度してみませんか。そんなキャッチコピーで募られたのは、今を変えたいと願う人たち。ここは何かに行き詰っている人、例えば就職早々に社会からドロップアウトしただとか、いまの生き方に自信がない人などが、一年間という期限付きながら再び学園生

活を送ることで、自分の人生を切り開いていくための準備をする場所だとされている。
入念に準備された計画ではあるが、この入島はその初回。これから一年間、参加者たちは懐かしの学生服に袖を通し、かりそめの学園生活を送ることになる。
舞台となるのは、御雲島と呼ばれる島全体。その中に來夢学園と呼ばれる学園が設立されており、参加者はそこへと通うことになる。
……説明が終わって間もなく、船上員が乗客達の荷物を配り始めた。
一人ずつ名前を呼ばれ、この島での生活のために持ってきた荷物を受けとっていく。
ボストンバッグにキャリーケース。雑貨を詰め込んだむき出しの段ボールと、様々な荷物が呼ばれた乗客に渡されていく。
「えー、星乃(ほしの)あやめさん」
「はい」
荷物の受け渡しが終盤に差し掛かったところ。そこで返事をしたのは、車椅子に乗った例の乗客だった。
荷物を受け取ったままたむろしている乗客達の間を縫うようにして、あやめと呼ばれた少女は船上員の元へ向かう。

「えっと……」
船上員が両手で抱えている段ボールが、あやめの荷物だった。
船上員の目が泳ぎ、その視線がスーツの女性スタッフをとらえる。
だが彼女は若い船上員の視線には気づかず、別の乗客の質問に答えていた。
「あ、私、あとでまた受けとりにきますので……」
よくあることなのだろう、あやめは一旦は受け取りを断り、器用に車椅子を操り方向転換しようとする。
そこに割り込んできた声があった。
「あの、すみません。私、君島翔っていうんですけど、良ければそちらの星乃さんの荷物も一緒に持っていきますよ。たぶん、同部屋なので……えっと、構わないですかね？」
「え？　あ、そうなんですか？　えと……では、ご迷惑でなければ」
「そうですか？　助かります」
言いながら、船上員はあやめの段ボールを翔の足元に置く。
「それから……キミシマさんのお荷物も、ですよね」
「はい」
船上員は後方に戻り、翔の荷物を探し始めた。
翔は足元の荷物を持ち上げ、あやめに向き直る。

「星乃さんの荷物はこれかな？」
「そうですけど……。たぶん一人じゃ無理かと、船上員の……」
翔を見上げていたあやめはゆっくりと、船上員のほうへ目をやった。
あやめの視線の先には、大きなキャリーカートを見つけてきた船上員。
「お待たせしました。あっ……どうしますか？」
まさか手で持っていく気なのか、という船上員の表情。
翔とあやめは、黙って目を見合わせたのだった。

スーツの女性スタッフが運転するワゴン車が、風を切るように真っ直ぐ走っていく。
後部座席には翔、あやめ、そしてそれぞれの荷物。船上員を含めて三人で困っていたところに、説明をしていたこの女性スタッフが気を利かせてくれたのだ。
「すごい、本当になにもないんですね」
窓の外。流れていくのはヤシの木ばかりで、翔の口から正直な感想

が漏れ出てる。
「そうですね、コンビニ、ファミレス、カラオケなんかの娯楽もないですから、落ち着いて勉強ができると思いますよ」
「あはは……」
車の揺れにあわせて、翔の鞄がずり落ちる。
あやめは、そんな翔の様子を外の様子と一緒に眺めていた。
ほどなく、ワゴン車が緩やかに減速し赤信号を前に停止する。
スーツの女性は、バックミラー越しに後部座席をちらりと見た。
「お二人は、どうしてこの計画に参加されたんですか？」
質問に、先に反応したのは翔だった。
「えっと、私は――」
少しだけ、考えて。
「――色々なことを勉強しなおして、自分の視野をもっと広げたいなと……思いまして。漠然としててすみません」
「いえいえ、いいですね。そういう目的の方はとても多いですよ」
スーツの女性は、バックミラー越しに翔に微笑んだ。
翔も同じく、ミラー越しに微笑みを返す。
「星乃さんはどうですか？」
質問の対象が移る。
翔も、あやめの顔をうかがった。

「わ、私は……」
自分の膝もとを見つめたまま、少しだけ自信なさげに。
車中にささやかな沈黙が流れ、エンジン音だけが無機質に響く。
そして、しばらく手慰みを続けていたあやめの両手が、自身の両足を強く握った。
「その……今の自分から、変わりたいと思ったからです」
「なるほど。本計画が、あなた方のような人たちへの一助となれば幸いです」
翔と同じく、漠然とした回答。
話が終わるとともに信号が青になり、再び窓の外をヤシの木が流れ始める。
後部座席の二人の視線は、今度はそこから外れて前を見ていた。
「この計画には、さまざまな事情を持った方々が参加しています。そのほとんどが社会人です。そして当計画では、皆さんがこの計画に参加している間も、学生ではなく社会人として扱うことになっています」
スーツの女性はハンドルを切って、続ける。
「……日本語以外のほとんどの言語には、『社会人』にあたる意味の言葉はないそうです。日本特有のこの言葉は、組織的な共同を求める

ように聞こえるかもしれません。ですがこの言葉は本来、とても自由で大きな可能性を持っているのだと、皆さんに感じてほしい」
　上り坂から平たんな道を経て、車がゆっくりと下り坂に差し掛かる。
　坂下の海岸側に、日差しを照り返すガラス張りの建物が見えてきた。
「学園と寮が見えてきましたね。どうか、この環境を最大限に利用して、この社会で自分ができる生き方を見つけてください。それが私たちの願いですし、なにより――」
　スーツの女性がバックミラーを覗き込むと、真っ直ぐに視線を返してくる二人と目が合った。
「ここは、そういう場所ですから」

・・・

　去り際にしていった自己紹介によると、スーツの女性スタッフは伊砂真（いすかまこと）という名前だということだった。

彼女は丁寧に二人を部屋の前まで案内し、いま翔とあやめの手には、その伊砂から渡されたばかりの小さなボタン式の鍵が握られている。

翔は左手にトランクを持ったまま、そのボタンを押す。

「こう、かな」

二人の目の前の扉が横にスライドし、部屋への入り口が開いた。

「おおー」「おおー」

きょろきょろと、小綺麗な空間を見渡しながら、翔は部屋の中へと入る。

「すごい。玄関も広いし、なんか色々ついてる」

間もなく、翔はこの部屋が一般的な部屋と少し違うことに気がついた。

玄関から室内への段差はなく、奥に見える部屋まで平坦な廊下が続いている。

壁には、ところどころ手すりが備え付けられていた。

翔はそれを見ながら、すこし驚いたように眉を上げる。

「へー、なるほどぉ」

「なんだか申し訳ないなぁ」

「いいじゃんいいじゃん」

翔は振り返り、あやめに微笑みかける。

　その後で手に持ったボタン式の鍵を点検するように眺めてから、扉に向けてもう一度ボタンを押した。
　扉のライトが緑から青に変わり、開いたままで固定された。
「とりあえず私荷物運んじゃうね。星乃さんは中でゆっくりしてて」
　軽い足取りで積み上げられた荷物に向かう翔を、あやめは目で追う。
「えっと、なんか私も……」
「そうだな──。……それじゃあ、島のパンフレット見て、ご飯食べられるところ探しておいてもらえるとっ」
　快活な声でそう答えて、翔は玄関前の荷物を奥へと運んでいく。
　おお──すごい、これがバリアフリ──ってやつかあ、なんて声が、玄関の外にまで聞こえていた。
　あやめは小さく笑って、車椅子を操り翔へと続く。
「おじゃましま──す……」
　天井を仰ぐように部屋を見回した翔とは対照的に、あやめは視線を低く保ったままだった。
　ゆっくりと車椅子を進めていき、廊下を曲がった先の扉の前。横についたボタンに手をかざすと、あやめの目の前で扉がスライドして開かれる。

「……よかった……」

広くスペースを取った部屋の中央に、真っ白なトイレが据え置かれていた。

胸をなで下ろしながら大きく息をついたあとで、あやめは扉を閉め、翔がいる部屋のほうへ。

二つのベッド。二つの机。

広くて真新しい部屋に、あやめは頬を緩ませ微笑んだ。

そのまま翔が運び入れてくれた鞄に車椅子を寄せて、パンフレットと島の地図を取り出す。

まずはパンフレットのページをぱらぱらと。気になった箇所があるたび地図と見比べる。

「ん──……。ほとんど坂、だよね……。どうしよ……」

島は、中心を境にして西側を第一地区、東側を第二地区と、便宜上二つに分けられている。

これは地名ではなく、トライメント計画による区分だった。

あやめは、第一地区の南海岸側に位置するこの寮の部分に指をおいた。

そして、そのまま北側へと、ゆっくり指を動かしていく。

「どう？」

後ろから歩み寄っていた翔が、あやめの肩に手をおいて声をかけ
る。
「わあ⁉」
「おお？」
勢いよく振り返ったあやめに、翔は大袈裟に驚いたような仕草を返
す。
「なんかいいところあった？」
そのまま、あやめの横から翔も地図を覗き込んだ。
「え、えっと。まだ、お昼にはちょっと早くて、パン屋さんしかやっ
てないですね」
「パン屋さんいいじゃん！　そこ行こっ。んで、パン買って島のどこ
かでご飯にしようよ」
飛び跳ねるような翔の声。あやめに異論はなく、小さな声で頷いて
返す。
「よし。それじゃあ私、伊砂先生のところ行って車の貸し出し申請だ
してくるから、ちょっと待っててね！」
「え！　あっ……」
翔が足早に部屋を出ていく。あやめが声を掛ける間もなく、玄関の
扉が自動で閉まった。
「」

……」

あやめはしばらく、その扉を眺めて、ぽつりと。

「よろしく……お願いします……」

遅ればせながらのご挨拶。新しい生活の、一年間のルームメイトへと。

　ぺこりとお辞儀をしながら、続けてあやめは囁くように息を吐いた。

「……はぁ」

・　・　・

「ふんふんふーん」

ハンドルを握り、翔は鼻歌まじりに自動車を走らせていく。

職業柄、普段はあまり自動車に乗ることはなかったが、かといってペーパードライバーというわけでもなく。助手席にあやめを乗せて、ヤシの木の間を抜けていく。

一方助手席に座ったあやめは、手元の地図をせわしなく回していた。

「あれっ？　ここ……じゃない。あっ……」
手元の地図と前方の地形を何度も見比べる。
「あっ！　次！　右です！　そこそこ！」
「え？　ここ？　曲がっていいのこれ？」
「はい！」
「うわーっ、狭っ」
車一台がやっと通れるような道を、翔は器用に曲がっていく。
左右には小さな畑と民家が並んでいる。
「道なり？」
「あ、えっと……は、はい……多分……」
時折窓の外を流れる看板を頼に、あやめは地図で現在地を確認する。
「うわっ、前から車きたんだけど！　ひーーまじかまじかあっ」
車を停止させ、翔は来た道を振り返る。
狭い一本道が続いていた。
前方に視線を戻すと、ゆっくりと近づいてくる対向車。
翔は諦めたようにため息をつき、ギアをバックに入れて後方に発進する。
あやめはその間もずっと、地図と看板を見比べながら現在地を確認していた。

していた

「こんな道なかったし……あ、ここ、かな……」

翔は、小刻みにハンドルをたぐりながら、ゆっくりと車をバックさせていく。

「こわ……こわこわっ、溝があるけど見えない！」

「あっ、ここ……？　じゃ、ないな……。どこなんだろ……うぅ……」

「島やばーっ!!」

……そんなこんなで、目的のパン屋に着くころには予定の倍以上の時間がかかっていた。

駐車場に車を止めて、翔だけが買い物へ。

パン屋は外から中が見れる構造になっており、あやめが翔の買い物の様子を眺めていると、ほどなくして会計を終えた翔が戻ってくる。

「おまたせっ」

「あ、ありがとうございます」

運転席に乗り込んだ翔は、白いビニール袋をあやめへと差し出す。

「なんか創作パンが多かった。とりあえず色々買ってみた」

「わ、かわいー。これおいしそう」

「ね！　好きなの選んでいいからねー」

パンを選び始めたあやめを横目に、翔はペットボトルのミネラル

ウォーターを一口。
「ふう。なんか結局、パン屋さんが言うにはどこに駐車しても大丈夫なんだって」
「そうなんですか？」
「うん。エンジンつけたまんまでも、盗む人もいないって。ま、それでも貴重品は持っていったほうがいいだろうけどね」
その言葉に、あやめが目を丸くする。
「平和だあ」
「私、ずっと都会だったから、なんかすごい新鮮……星乃さんも水飲む？」
翔は、飲みさしのペットボトルをあやめに差し出して聞いた。
「あ、いえ。私は大丈夫です」
「そっか」
翔はペットボトルの蓋をしめ、ボトルホルダーにおいた。
ごそごそと、あやめが袋の中身を物色する音が車中に響く。
「星乃さんも結構都会なの？　出身」
「出身？　あ、えっと……」
「ん？」
あやめは創作パンをあさるのをやめて、手をもじもじをし始める。
不思議な沈黙に、翔が首をかしげていると、あやめが小さくぼそり

[illegible]
と。
「……すみません、実はよく知らなくて」
「知らない？」
「はい……」
「何県、とかも？」
「……はい」
「おお、そっかそっか、わからないなら大丈夫だよ」
翔は微笑みながらうなずいて言葉を返した。
「あ、でも出身がよく分からないだけで。えっと、ここにくる前は千葉県に住んでました」
「おおー！　私東京だから隣じゃん！　近い近い」
「あ、そうなんですね。やっぱり都会の人が多いのでしょうか」
「どうなんだろうね。新しいクラスとか楽しみだなー」
「私は今から胃が痛いです」
「あはは、私がいるからダイジョーブ！」
翔が緩やかな動作で、あやめの背中を叩く。
あやめは笑って、頷いた。
「よしっ。じゃそろそろ行こうか。パンを食べるにもちょうどいい時間だし」

翔は運転席の椅子に座り直し、車のエンジンを掛ける。
合わせて、あやめも再び地図を取り出した。
「次は桜公園？　だっけ？」
「えっと……、そうですね。パンフレットによると、景色が凄い綺麗だとか」
「はいはーい。それじゃあ案内よろしくね！」
翔がアクセルペダルを踏みこむ。
色とりどりの創作パンを手に入れて、二人はパン屋を後にしたのだった。

・
・
・

「綺麗……」
桜並木を見上げながら、あやめが呟く。
「ほんと。今のこの構図、客観的に見たら絵になるだろうなあ」
車椅子を押す翔も、同じように桜を見上げながら言った。
「あはは。そうかもしれませんね」
ゆっくり歩く、二人に、風に吹かれた花びらが舞い落ちる。

ゆっくり歩く二人に、風に吹かれた花びらが舞い落ちる。

――桜公園。

御雲島の観光名所のひとつで、中央に大きな桜の木を中心とした広場があり、それをぐるりとかこむように桜並木の高台が設置されている場所だ。

満開の桜が咲き乱れるその風景は圧巻で、いまも春風に揺られて桜の花びらがゆらゆらと辺りを舞っている。

そのうちの一片がひらひらと、あやめの頭にとまる。

翔は、その花びらを見つめたまま、あやめの頭を撫でた。

「えっ。なんですか？」

「あ、や、ごめんごめん。つい」

振り返ったあやめに見上げられて、翔は手を引っ込める。

「いい位置に頭があるなーって」

「…………」

あやめは言葉を返さないまま、口をつぐんで前を見つめた。

桜は絶え間なく二人の上に舞い落ちる。

車椅子のタイヤが砂利を踏む音が小気味よく続いていた。

「お。みてみて、あそこなんかよくない？　あれが広場かな」

並木道は、大きな円状の広場に繋がっていた。

パンフレットにもあった通り、中心には一本の桜の木が立ってい

る。
「あー、なるほど」
翔は広場に繋がる下り階段の前で車椅子を押す手を止める。
斜面にかかる階段の左右には、コンクリートで舗装された坂があった。
「うーん、どうしよう」
翔は広場を見回すが、円状の広場には同じ形状の階段しかなかった。
「えっと……」
あやめが翔のほうを振り返る。
「一応こういう場合は、車椅子を後ろ向きにして、ゆっくり降ろすんですけど……」
「やったことない人がやるのは危ないよね……」
「そう、ですね……」
車椅子を操作した経験は、翔にはほとんどない。
わずかな沈黙。
その沈黙を、翔の明るい声がやぶった。
「ここからだと丁度全体が見渡せるし、ここで桜を眺めながら食べようか」
「そうしましょうか

そうしましょうか」
あやめも微笑んで翔に返す。
翔は車椅子のブレーキを後方に引いてその場所に固定した。
持ち手の部分にひっかけていたビニール袋を手に取り、中を覗きこむ。
と。
「　あの」
後方から声をかけられて、翔とあやめが振り向く。
鈴のように綺麗な声。声をかけて来たのは、その声に劣らず可憐な容姿の小柄な少女だった。
年のころはあやめよりもやや下くらいだろうか。けれどその落ち着いた雰囲気からして、同世代のようにも感じられる。
透き通る肌と、同じくらいに透き通るように綺麗な白銀の髪。ロングヘアが陽光を照り返し、その佇まいはまるで絵画から抜け出てきたどこかのお嬢様のよう。
「もしよければ、下まで降ろしましょうか？」
思わぬ申し出に、あやめはゆっくりと翔を見上げた。
二人そろって、出てきたのは当然の疑問。
「えっと……」
「あの、大丈夫、ですか……？　操作とか、それ以前に筋力的なもの

とか……」
「ここよりも急な坂をたくさん経験していますので、大丈夫ですよ」
「おお……」
翔があやめを見下ろし、二人の目が合う。
「お願いする？」
あやめは、翔にうなずきを返してから少女に向き直った。
「じゃあ、お願いしてもいいですか？」
「はい。では、失礼をして」
少女が車椅子に歩み寄り、翔が場所を譲る。
手慣れた手つきで車椅子のブレーキを外す。
「上げます」
ひとことあやめに声をかけて、車椅子をゆっくり回転させ、少女は坂道に足をかけた。
「怖かったら言ってくださいね。止めますので」
「はい」
……結局、声をかけて来た少女は汗一つかかず、華麗な身のこなし

て車椅子を広場へと降ろした。
その手際の良さに、翔が思わず「おおー」と感嘆の声を漏らす。
「あ、ありがとうございましたっ」
「ありがとうございました」
「いえ。私はしばらくここにいますので、帰るときにまた声を掛けてください」
「おお……何から何まで、助かります」
頭を下げる二人を一瞥して、少女は広場の隅へ歩いていった。
その後ろ姿を、翔とあやめは黙って見つめる。
「なんというか、すごい綺麗な子だったね」
「うん、お姫様みたいでした」
「この島の子って感じではなかったよね。やっぱり同じ計画に参加する子なのかな」
「だとしたら、ちょっと気になりますよね。本当にお嬢様なのかも」
「うわーなんかわくわくしてきたなーっ」
翔の声が、楽しげに跳ねた。
あやめは翔を見上げて、微笑む。
「楽しそうだなあ」
「えー？　だって楽しくない？」
「私は……不安です」

車椅子のハンドリムに触れながら遠くを見つめるあやめを、翔は見下ろす。

「大丈夫だよ。私ももっと車椅子のこと勉強するし、車もあるから島の大体の場所は行けるんじゃないかな」

あやめは、翔のほうを見上げて、少し気まずそうな笑みを浮かべた。

「それじゃあ、前となにも変わらないから……」

「変わらないと、だめなの？」

「……」

あやめはなにも応えなかった。

翔は、あやめに聞こえないように小さく息をついてから、言葉を続ける。

「わかった。じゃあ星乃さんの自立を、私も手伝う。ルームメイトだし、それくらいはいいでしょ？」

「えっ。で、でも……」

「おけおけー。まあ、少なくとも私には気をつかわないでね。好きでやってることだからさっ」

あやめは俯いて、翔に言葉を返さなかった。

翔は、そのあやめの顔を覗き込むようにかがみ込む。あやめは少し

顔を引き、翔との距離をとった。
それでも、翔は顔を寄せる。
「お一け一？」
「お、お一け一」
観念したあやめの回答に、翔がにんまりと微笑む。
それから手に持っていたビニ一ル袋を掲げた。
「よしよし。じゃあああそこでご飯、食べよっか」

食後。
休憩がてら、翔はあやめから少し離れて、景色の写真を撮り始めていた。
満開の桜をフレ一ムに収めて、シャッタ一を押していく。
少しずつ角度を変えて、何枚も、何枚も。
液晶画面を凝視しながら、風景写真を撮り続ける。
作業に没頭する翔。その顔を覗き混むようにしながら、一人の女性が近づいていた。
「あの……、もしかして君島先輩ですか？」
手を伸ばせばとどくところまで翔に近づいた女性が声をかけた。

あやめとは異なるその声に、翔はデジタルカメラを降ろして振り返る。
「えっと……？」
自分の顔を覗き込んでくる女性の顔を、翔は眺めた。
「あ、あの。私のことわかりますか……？　河居織鶴（かわいおりつる）です、高校時代の――」
「えっ？　河居さん？」
翔が、正面に立った織鶴を上から下までゆっくり眺める。
「……」
その視線を、織鶴の顔に戻して。
「えっ、えええええーーっ!?」
「やっぱりー！」
織鶴は嬉しそうに言った。
翔は両手で頭を抱え込む。
「え、うっそ!?　だって……ほんとにあのりっちゃんなの？」
「うわっ、なつかしーそのあだ名！」
そう言いながら、織鶴は翔の肩を叩く。
河居織鶴。

翔の高校時代の後輩で、翔の過去を知っている数少ない人物でもある。
あやめと翔の中間くらいの長さの黒髪を後頭部で結った、いわゆるポニーテルの女の子。
翔は頭を抱えたまま、呆然と織鶴を眺めた。
「いやいや、まじか――……むっちゃ久しぶりじゃん……。ていうか！　身長伸びたね⁉」
顔を上げた翔が、織鶴を見上げながら大きい声で言った。
「それを言うなら先輩も髪、ばっさり切りましたよね。なんかよりボーイッシュ的になったというか！」
「あっ、そうだよね。当時は結構長かったもんね……」
翔は少し頬を赤らめ、指で首をかいた。
その言葉に、織鶴が頷く。
「いや――、すごい偶然だな。まさかこんなところで再会するなんてっ」
「ほんとに！　だってもう、七年ぶりくらい？」
「ですね――。七年も経てば人は変わるんですね――」
言いながら、今度は織鶴が翔をじっと上から下まで眺めていく。
「ん？」
「いやあ……先輩けっこ――サバサバしてたじゃないですか。なんかイ

メージ変わったなーって」
「えっ、そうかなー？」
「そうですよー。見た目に反したギャップもまたよかったですけど……」
　言葉をとめた織鶴が、ハッと翔をみる。
　翔がその視線を見つめて、少し首をかしげていた。
「あっ、先輩はまだイベントとか、出られてるんですか？」
「あー、最近はでてないねー」
「じゃあ、コスプレとか男装もしてないんですか？」
「まーそれはごくたまーに」
　翔は、少し照れたように言った。
「りっちゃんは、まだイベントとか出てるの？」
「いやー最近はお仲間もいないですからねー。しばらく参加してません」
　右手をひらひらと振って、織鶴が応じる。
「そっかそっかー」
「はいー」
　そう言って、互いに微笑む。
　再会を祝しての、思い出談義。それもいいけれど、当然のように互

いに抱える疑問はひとつ。
「……え。というか、どうしてここにいるの？」
「えっと……」
「旅行？」
「……先輩、トライメント計画って知ってます？」
「うわー」
翔は、右手で両目を塞ぎ、大げさに天を仰ぐ。
「やっぱりかー」
予想通りの展開に、織鶴も敬愛する先輩と同じポーズであとに続いたのだった。

「はじめましてじゃ、ないよね……」
あやめの視線の先。そこでは、自分の知らない少女と談笑するルームメイトの姿があった。
明らかに知己。なんとなく、あやめはその光景から目を逸らすように空を眺めた。
相変わらず花びらは舞い続けている。
そんな視界の端から、今度はあやめに声がかけられた。

[illegible]

「こんちわ」

振り返ると、あやめと同じくらいの年齢に見える少女が立っていた。

肩口までの明るい茶色の髪と、切り揃えられた前髪。目元もぱっちりとしていて、翔やあやめとは違うタイプの少女だ。花弁とともに、白い薄手のセーターが少しだけ風に膨らんでいた。

「こんにちは……」

「あの人って、ルームメイト？」

少女は翔を指さして言った。

翔はまだ、あやめが知らない誰かと楽しそうに談笑している。

「そうですけど……」

「そう。なんか、感動の再会って感じだよね」

「……」

少女は手を後ろについて、つまらなそうに足を蹴り上げる。

こすられた芝生がかすかに舞い上がった。

あやめは少女の様子を黙って眺める。

「あなた、名前は？」

「えっ。……あ。星乃あやめです」

「あたしは夏己文実（なつきふみ）。あそこにいるもう片割れのルームメイト」

「ああ……」
あやめが再び視線を投げる。
その横では、どこか無遠慮に文実があやめの車椅子を眺めていた。
「どうして、星乃さんはこの計画に参加したの？」
「え？」
ぶしつけな質問に、あやめが言葉をつまらせる。
あやめは、自分の両足を見つめながら答えた。
「えっと、社会復帰のために――」
伊砂に聞かれた時と同じような回答を繰り返す。
文実は、ふんふん、と頷いて。
「まじめだな―。年は？」
「二十歳です」
ぶしつけな質問の連続に、あやめの言葉から感情が消えていく。
けれど意外にも、「二十歳」という言葉に文実は初めて破顔した。
「お―！　一緒じゃ―ん！　あたしも二十歳。よろしくね、星乃」
初めての、そして予想外の笑顔。
その表情を、あやめは呆けたように見つめ、小さく「よろしく……」と返すことしかできなかった。

「え⁉　じゃあ先輩、本当に漫画家になったんですか⁉」
なぜトライメント計画に参加しているのか。加えて、今までどうしていたのか。
そんな話をしていた最中の織鶴の大きな声に、翔が慌てて諫める。
「たしかに商業誌だし、漫画家って言って語弊はないけど……。あっ、でもここでは内緒にしてね。私、普通に学園生活を送りたいから」
「はあ一……。本当にあれから頑張ったんですね……」
「う、うん、……まぁ、そう、だね」
翔が複雑な表情を見せる。
それに特に気付くことはなく、織鶴は了承の旨を返した。
「了解ですっ。私も先輩とは普通の学園生活、送ってみたかったですしね」
「そうしてもらえると」
「でもそれを隠すなら……、どういう設定でいくんですか？」
織鶴が目を輝かせて聞いた。
「う一ん。ドロップアウトした社会人ってところかな……。まあ、半

分事実だし」
「闇が深そー」
「深くない。深くない」
　翔が苦笑いしながら右手をぶんぶんと振る。
「私的には、りっちゃんが海外での仕事を目指してることのほうがびっくりだよ。昔はそんな素振りなかったのに」
「まだただの願望ですけどね。それこそ、これからですよ」
「いいじゃんいいじゃん。りっちゃんが無事海外に住めたら、いつか案内してよ。資料もいっぱい撮りたいし」
「おおー。いいですよお！　そしたら私の名前スペシャルサンクスに載せてほしいなー」
「だったらアシスタントやってよー。まだあんまりお給料だせないけどっ」
「無理無理無理。もう無理です。本当あれから全然ですもん」
　半ば本気のような翔の嘆願に、今度は織鶴がぶんぶんと右手を振って返す。
　一呼吸置いたところで、織鶴が改めて切り出した。
「そういえば、あそこに座っている子って先輩のルームメイトですか？」
見泉りも。

視線の先、そこにはあやめと、翔の知らない少女——文実が話し込んでいる姿が。
その状況に、翔が少なからず意外そうな表情を見せる。
「うん、そうそう。ということは、隣で話してる子が、りっちゃんの？」
「そうですね。昔の知人に似ている人がいたから声かけてくるって言ったら、適当に散歩してるって言ってたんですけど」
「どういう子なの？」
質問に、織鶴は顎に指を当てて、少し顔を上に傾けて考えた。
「んー、流石にまだよくわからないですけど、なんとなく警戒されている気がしますね」
「あら」
「まぁ、初日ですしね」
「見ての通り、私のルームメイトは両足が不自由で車椅子の子なんだけど、すごくいい子だよ」
「あー、それじゃあやっぱりあの子が」
微笑んでいた翔が、驚いたように口を開けた。
「知ってるの？」
「この計画が始まる前に、軽い面談があったじゃないですか」

翔はうなずいて、織鶴に続きをうながす。
「あのときルームメイトの話になって、車椅子の子がいるんだけど、どうかって聞かれて」
「あー、他の人にも聞いてたんだね」
今度は織鶴が、少し驚いたように眉を上げた。
「ん、じゃあ先輩が承諾したんですか？」
「そうだね」
「……それは、なんか意外です」
「まあ、ちょっとね。……あ、同情心から受けたとか、そういうんじゃないからね。念のため」
「まあ、先輩に限ってそういうことはないでしょうけど……」
織鶴は黙って広場のあやめを見つめた。
しばらくそうした後、翔を見て、うながす。
「じゃあ先輩、ちょっと紹介してくださいよ。こっちも紹介しますんで」
「ん、そうだね。私たちも行こっか。おーい」
二人は揃って、楽しそうに話しているそれぞれのルームメイトのもとへと足を向けたのだった。

「あたし、将来の夫を探しに来たんだよね。短大で出会いがなさすぎてさ一。二年なんて職業訓練で終わりじゃん」

「あ、うん」

相変わらず会話の主導権を握られながら、戸惑いがちにあやめが頷く。

桜の木の影が太陽の動きに合わせて、少しずつ動いていく。

木陰にいたあやめに、陽があたり始めていた。

「お兄ちゃんから聞いたんだけどさ、この計画って意外と倍率高いらしいよ」

「そうなの？」

「星乃ってこの計画の面接と適性検査受けた？」

「うん」

「あの試験って嘘つくと矛盾が発生するようになってるから嘘つけないじゃん。だからあたしも真面目にやったんだけど」

そしたら受かったんだよね一、と文実がけらけらと笑う。

「だからどんな人がいるんかな一と思ってたんだけどさ。やっぱり変わってる人多そうだよね一」

「……ええと、それは、なんというか」

あやめはぼんやりと、翔たちへと視線を移す。
するとちょうど、翔がぶんぶんと右手を振っているところだった。
「夏杞さんのルームメイトはどんな人なの？」
「ん一。真面目？」
「夏杞さんからみたらみんな真面目になりそう」
「そうかも」
正直すぎる回答に、あやめがくすくすと笑う。
「夏杞さんっておもしろいね」
「よく言われる。星乃のルームメイトはどんな人？」
「すごく、いい人だよ。いい人過ぎるくらい」
「へ一。うちのと交換しようよ」
「ええ……。まだ一日目だよ……」
「もう女子はいいんだよ、女子は。結婚相手を探しに来たんだからあたしは」
「私も女子なんだけどな一」
「え一？　じゃあ結婚する？」
「ええっ！　そうなるの？」
あやめの頬が赤くなる。
それを見て、文実はくすりと笑った。
「[illegible]

ま、そういうわけだから、いい男子いたら紹介してよ」
「うーん……わかった。もし、いたらね」
ほどなくして、翔と織鶴があやめと文実のもとへと戻ってきた。
「星乃さん、ごめんね。話し込んじゃって」
「ううん。知り合い、だったのかな？」
翔の隣に立つ織鶴が、会釈するように顔を少し下げる。
「あ、君島先輩借りちゃってごめんなさい。私、河居織鶴っていいます。よろしくね」
「あ、いえいえ。私は、星乃あやめです。よろしくお願いします」
車椅子に座ったまま、あやめが丁寧に会釈を返す。
隣から翔が口を挟んだ。
「あ、りっちゃん。言い忘れてたけれど、ここでは先輩禁止ね」
「え、無理」
即答。
「なんで⁉　ここではみんな同級生な訳だし、私だけ先輩って呼ばれてたら浮いちゃうじゃん」
「えー。じゃあ先輩という名前ってことにしましょう」

「えぇ……」
文実はじっと翔を見上げたままだった。
「あ、勝手に盛り上がってごめんなさい。私、君島翔っていいます。よろしくね」
「いえ。あたしは夏杞文実です。よろしくです、先輩」
「あはは……」
苦笑いで文実と目を合わせたまま、翔は織鶴の頭をはたく。
「イタッ。……いやまあとにかく、学園が始まる前からこれだけ知り合いができたのは嬉しいですね。せっかくなので、ご飯とか一緒しますか？」
「あ、私たちさっきパン買って食べちゃった」
「うげ、まじっすか―」
「ま、別に私は何か軽いもの頼むから大丈夫だけど」
「あ」
遮るように、あやめが声をあげる。
「どした？」
「あ、あの……ごめんなさい。実はちょっとトイレに行きたくて……」
「あ、そっかそっか。じゃあ……」

翔に、首に手をあてて、織鶴を見る。

「ああ、ご飯はまた今度でも大丈夫ですよ。これからいつでも会えるし、またの機会にしましょう！」

「すみません……」

「大変だな一、星乃」

文実があやめのほうを向いて、言葉を挟んだ。

「あはは……。夏杞さんもごめんね。また今度、よかったら一緒に食べようね」

「うん、またね」

あやめにそう言うと、文実がすたすたと歩き出す。

織鶴はおどけたような表情を翔とあやめに見せてから、早歩きで文実を追いかけた。

翔とあやめはそれを見送って、一息。

「気づけなくてごめん。我慢してた？」

「いいえ。まだ大丈夫なんですけど、時間を決めていくようにしていて……」

「わかった。寮の部屋まで戻ったほうがいいよね」

「すみません。そうしてもらえると助かります……」

　幸い、あやめを広場まで降ろしてくれた白銀の少女は、まだ広場に端で佇んでいた。
　翔とあやめが声を掛けると、少女は再度、あやめの車椅子を高台へと戻してくれることに。降りてきた時と同じ階段の下で、少女が車椅子のハンドルを握る。
「すみません。よろしくお願いします」
「はい。それでは斜面をのぼります」
　少女は車椅子が階段横の斜面に対して正面になるように調整し、自分の重心を預けるようにして車椅子を押し込む。
　安定した動きで、車椅子は斜面をのぼっていった。
　その隣で翔が一段一段、ゆっくりと階段をのぼる。のぼり終えるまで、そう時間はかからなかった。
「車体、戻しますね」
「はい」
　斜面をのぼりきり平坦な道を少し進んでから、少女は車椅子を止めてブレーキをかけた。
「大丈夫でしたか？」
「はい、何度もありがとうございます」
「[illegible]」

「ありがとうございます」
二人がぺこりと頭を下げる。
少女はそれを見て、笑みを浮かべた。
「いえいえ。それでは」
「あ、あの」
立ち去ろうとする少女の背中に、あやめが呼びかけた。
「どうしましたか？」
「あの、よかったらお名前をうかがってもいいですか？」
風が吹き、少女の長い髪が流れる。
「はい。私の名前は二上（ふたかみ）ユウです。どうぞ、よろしくお願いしますね」

・・・

翔は荷ほどきをしながら部屋の整理を進めていた。
段ボールの中には日用品に混ざって、とある一冊の漫画が入っている。
[illegible]

荷ほどきの手を止めて、その本を手に取る。
『親愛なるあなたへ』
表紙にはそう題字が書かれていた。
「……」
翔はしばらくその表紙を、ぼんやりと眺めた。ほどなくして廊下の奥のトイレから水を流す音が聞こえてきたため、翔はその漫画を鞄の中へと紛れ込ませる。
何食わぬ顔で荷解きを再開。
床においてある大きなボストンバッグを開くと、中にあるのは衣服と下着類だ。ベッド裏の棚を開き、中に下着から順番にしまっていく。
部屋の扉には緑のライトがともり、開いたままになっていた。用を足したあやめが、車椅子で部屋の入り口にやってくる。
「なんか……前の生活よりずっと快適かも」
「お、そうなんだ。確かに、すごくいい設備だよね」
「うん」
翔は下着をしまい終えて、クローゼットに移動した。
その動きを、あやめはじっと見つめる。
「あの……きみしま、さん」
「[illegible]

「ん、どしたー？」
クローゼットを閉めながら、翔が振り返る。
「あ、いえ……。なんでもないです」
「うん？　なになに？」
「あ、本当に、なんでもなくて」
「そうなの」
「はい……」
あやめは少し俯いた。
両手の親指を交互につまむように、手慰みをする。
翔はしばらくそれを眺めてから、腕を組んで天井を見上げた。
照明に備え付けられた五枚羽のファンが、ゆっくりと風を回していた。
「あ、そうだ」
翔の呼びかけに、手慰みを止めて、あやめが翔を見上げる。
「　？」
「私、普通に接しちゃってたけどさ、星乃さんも私に敬語とか使わなくていいからね。むしろ、もっと砕てくれると嬉しいなー」
「わ、私は……デフォルトがこれでして……」
「えー。でもさっき夏杞さんとは普通に話してたじゃんっ」
「あ、あれは……同い年だったので」

「私、星乃さんと同い年だよ？」
「えっ」
あやめが翔の顔をまじまじと眺める。
「きみしまさん……二十歳なんですか？」
「うん、だからほらほら」
「えー！　絶対嘘ですよ！」
「私ってそんなに老けて見える……？」
あやめは少し慌てたように、両手を振った。
「あ、いえ！　見た目的にはすごくお若いといいますか、むしろ現役の学生さんって感じなんですが……。え……本当に、二十歳なんですか？」
「……」
「……」
互いに見つめ合ったまま、二人しかいない部屋に奇妙な沈黙が流れる。
「……」
「……」
「ごめん、二十四です」
「ですよね一……！」

あやめが両手を胸におき、息を大きく漏らす。
「よかった。君島さんが同い年だったら、それはそれで自分との差にショックを受けそうです」
「いやいや。それは過大評価だよ。あ、みんなには年齢は内緒ね。この一年はピチピチの翔さんでいきたいのだ」
「あはは。普通にいけると思いますよ。――あっ！」
遠慮がちに笑っていたあやめが両手をパンと合わせて、目を輝かせたまま、言った。
「私も、君島先輩って呼ぼうかな」
「それだけはダメ――!!」

学園寮から少し離れた別館の入り口。
行き交う人々の流れをぶった切るように、背の高い青年が腕を組んでその往来に立ち止まっていた。
青年は床の一点を凝視している。
翔がふらりとそこを覗くと、そこには茶色い羽虫が一匹。
「ふむ」
翔が声を出すと、青年は初めてとなりに翔が立っていることに気が

ついたようだった。
「あ、ああ……。俺のことは気にしないでくれ」
「虫、怖いんですか？」
「ん、まあ……」
歯切れ悪く、青年が答える。
翔は虫の隣を通って、建物入り口の扉を開けた。
「ほら、大丈夫ですよ」
翔が青年に声をかけると、青年は眉を寄せて翔の顔を見やって言う。
「この虫、俺を見ているんだ。他が眼中にないだけで、俺が通ったら間違いなく、こいつはアクションを起こす」
「モテモテですね」
笑うでもなく、呆れるでもなく、翔も青年を見返して言った。
翔は扉から一歩、建物に踏み出し、虫をまたぐようにして立ち、少し手を広げる。
「私がガードしてるんで、どうぞ」
「……失礼する」
青年は、大袈裟にため息をついて、額の汗を拭ってから足を踏み出す。

ライオンの襲来に怯える子鹿のような足取りで虫の横を通り過ぎると、青年は足早に扉まで進んだ。
「ほら、大丈夫」
扉まで辿り着いた青年をみて、翔が言う。
「……ありがとう」
翔も虫から離れて、扉の前で立ち止まった。
扉を開けて、青年を中へ促す。
「ああ、すまん」
青年は建物の中に入ってから振り返る。
翔の顔を見下ろして、視線は再び虫のほうへ。
青年の動きが止まる。
虫がいない。
元いた場所からいなくなっていた。
「？」
気のせいだろうか。
不審げに目を細めた青年の視界を、虫の影が横切っていく。
「！！！！！」
咄嗟に避けた青年が翔に身を寄せ、肩を強く抱いた。
「うお」
虫は、開かれた扉の前を少し旋回してから、折り返して外に飛んで

早く開かれた扉の前を少し回避して、さらに抜け出して外に飛んでいった。
見えなくなるまで睨みつけて、視界から完全に消え去ったところで青年からは安堵の息。
それとともに自分の手が翔をひしと掴んでいることに気づき、飛び退くように離れた。
「！！　す、すまん！」
「あはは、本当に飛んできたね」
「ああ、いや……。すまん……」
「へーきへーき、もーまんたい」
翔は笑いながら、窮地を脱した青年と別れ扉の中へと入っていく。
青年は、歩み去っていく翔の背中を、内唇を噛みしめて見送っていた。

青年はすぐに翔に追いつくなり、俺は喜羽正明（きばまさあき）だ、と無愛想に自己紹介した。
律義に、きっとお礼のつもりなのだろう。これも何かの縁、と翔も自己紹介を返すと、二人はそのまま並んで売店へ。

[illegible]

併設された広場は、すでに半分ほどのテーブルが埋まっていた。売店で買ったお弁当やお菓子などがそれぞれのテーブル広げられていた。

ほとんどが二人組。翔と喜羽もまた混み合った売店に入り、人の間をぬって奥へと進む。

「お、よかった。弁当まだ残ってる」

「本当？　よかったー」

『本日の弁当』と書かれた台の上に、弁当が平積みしてあった。

喜羽は一つ手に取り、カゴへ。

その様子を見て、翔は少し首を傾げた。

「お弁当、一つだけでいいの？」

翔が弁当を二つカゴに入れながら聞いた。

「ああ、食べるのは俺だけだからな」

「ルームメイトさんは？」

「ん、なんか外で食べてくるらしい」

「えっ。もう喧嘩したの？」

「いや、違う。……なんだ、一人が好きなんだそうだ」

「あー、なるほどね」

翔はうなずきながら言った。

翔は[illegible]
弁当に続き、二人は飲み物のコーナーへ。
「君島の相方はどうしてるんだ？」
「部屋で荷物の片づけしてる。荷物が結構多かったみたいだから」
「うまくいってるのか？」
「だといいなあ。私がちょっとお節介過ぎるから、嫌がられてないといいんだけどね」
お節介。
すでにお節介をその身に受けた喜羽が真面目に答える。
「大丈夫だろ。なんというか、君島のそれは嫌な感じが全然しない」
「そうかな？」
「ああ」
そう言ってから喜羽は、緑色のパッケージの冷えた緑茶をカゴに入れた。
翔は烏龍茶と無糖の紅茶を二本、カゴに入れる。
すぐ横のお酒コーナーでは、何人かの女子がお酒を選びながら盛り上がっていた。
「初日からお酒か。羽目を外しすぎだな」
「えっ？　あ、そ、そうだよね」
「一年なんてあっという間に過ぎるからな。遊んでる暇もない」

喜羽はまっすぐ前を見たままで言った。

「だ、だよね—」

翔の引き攣った笑いに喜羽が気付く素振りもなく、二人は買い物を済ませていく。

会計を終え、広場で軽く食べていくという喜羽に対し、あやめとの夕ご飯となる翔。

別れ際。

「これからよろしくな。君島」

「うん。こちらこそ、よろしくね、喜羽くん」

そう言って、つい今しがた知り合いになった二人は別れたのだった。

・・・

あやめは一人、部屋で翔の帰りを待っていた。

二人分の夕ご飯を買ってくる、と言って部屋を出た翔を見送ったのがついさっき。

そのことに感謝の意を示しながら、あやめはこの時間を利用して寄

そのことは意識の意を示しながら、あやめはこの時間を利用して荷解きを続けていた。

「……ん―」

それなりの荷物。

手元には持ってきたデザイン関係の参考書と、使い慣れたノート類。机の本棚に差し込もうとして、少し逡巡した後、あやめは参考書だけを背表紙が見えないよう逆向きにして差し込んだ。その手前、自前のタブレット端末は机の上に置いておくことにする。

続けて鞄から取り出したのは、勉強に使うのとはまた違ったルーズリーフ。あやめの手が少しだけ止まり、そのまま中のページを開く。

『面接について』『生活費について』『確定申告について』……。

あやめのそれとは違う形の整った字が、罫線に沿って規則正しく並んでいた。

あやめの指が、その字をそっとなぞる。

「……」

感慨に耽っていると、部屋のインターホンが鳴った。

「あれ……？」

翔が出て行ったのはついさっき。もしかして鍵を忘れでもしたのだろうか。

首をかしげながら、ルーズリーフをしまった後、あやめが車椅子を

入口へと進める。インターホンを持ち上げて通話ボタンを押した。
「君島さん？」
あやめの呼びかけに、インターホンが沈黙を返す。
再び首を傾げたあやめが続けて呼びかけようとしたとき、翔のものではない声が返ってきた。
「すみません、八馬（はちま）と言います。公社から預かったお荷物を届けに来ました」
「あっ。す、すみませんっ。今出ますので、少しお待ちください」
あやめは受話器を戻すと、車椅子を玄関まで進めた。
鍵のボタンを押し、扉を開く。
「おお」
八馬と名乗った男性が、真新しいダンボールを抱えて立っていた。
明らかに私服であることから、きっと同じくトライメント計画の参加者なのだろう。歳は翔と同世代くらいか、どことなく整った顔立ち。髪はナチュラル気味にセットされていて、前髪が少し目元にかかっているものの、それほど嫌味な感じはない。声色も落ち着いていて、少し大人びているようにも見えた。
「自動ドアなんですね」
「まっ、そうなんです

「はい、そうなんです」
あやめの目線の高さに、ちょうど八馬の両手があった。
ダンボールを支える八馬の両手が、ぼんやりと視界に入る。
銀色のシンプルな指輪が、左手の薬指に光っていた。
「星乃さんで間違いないですか？」
「はい。そうです」
返答に、八馬が微笑んで小さくうなずく。
「車椅子用の学園の案内図と、予備のタイヤだそうです。上がってよければ中まで運びますが、どうしましょうか」
「あっ……すみません。じゃあ、お願いしてもいいですか？」
「はい」
八馬が荷物を抱えたまま廊下を進む。あやめも車椅子であとに続いた。
「どちらにおきます？」
「あ、えっと……」
あやめは部屋を見回す。
そして、ゆっくりと空いたスペースを指さした。
「そこの、入口の近くにおいていただけると……」
「わかりました」
八馬は慎重に荷物を下ろす。

これでよろしいですか、という確認にあやめが頷いて返すと、「では、これで」と一礼して八馬は部屋を後にした。

不愛想ともとれるが、必要以上の干渉をしないよう気を使ったともとれる態度。

「あ、ありがとうございました」

あやめが部屋から声をかけると、去り際、八馬は再び軽く会釈をして去っていった。

「ああいう人もいるんだ……」

呟きながら、あやめは再び本棚の整理を開始する。

ちなみに届けられたのは車椅子のタイヤのスペアだ。確かに入寮時の説明でスペアを用意してくれるという話だったので、それも後で整理しなければならないだろう。

……そんなことをしていると、しばらくして、二人分の夕ご飯を抱えた翔が帰ってくる。といっても、今すぐ食べるわけではなく、後程食べるための買い置きだ。

時計を見れば十六時半。十七時から学園で改めて説明があるという話だったので、翔とあやめは連れ立って、寮から來夢学園へと向かったのだった。

学園の屋外ホールには、全参加者が集められていた。
壇上、島の全景が映し出されたスクリーンの前でマイクに向かってしゃべっているのは、職員である伊砂だ。
　集まった参加者たちに向けて簡単な挨拶を告げた後、引き続き本計画そのものについての説明を始める。
「当トライメント計画は、私たち公益法人社会福祉公社LieFが、主に国から支援を受けて運営をあずかっているものになります。計画の目的は、第一に新しい人生を踏み出すための一歩となるための場所および環境の提供です。さまざまな理由から本計画に参加された皆さんに対し、來夢学園での学生生活などを通じ、皆さんにとって曖昧な未来を明確にするお手伝いをさせていただきたいと考えています。
　第二には、これは皆さんというよりも我々側の目的となりますが、皆さんには一年間の生活補助と学園設備の提供と引き換えに、この御雲島におけるとある社会システムの運用試験の参加者となっていただきます。これは元々は地方再生や格差是正を目指して開発がすすめられた、ＡＩを利用したパッケージ型の社会システムが元となってお

り、今回はその実地試験となっています。みなさんに配布されたタブレット端末がその根幹で、まだ未定な部分もありますが、皆さんの生活をいくつかのＡＩが補助する予定となっています。
　社会福祉公社LieFは、よりよい、より幸せに過ごせる社会を目指し設立された組織です。昨今さまざまに複雑化していく社会問題について、学園のカリキュラムでも適宜取り上げていく予定です。みなさんが新たな社会生活に向けて頑張っていく中で、そういった問題について関心を持ち、最後は皆さんが自由な意志と選択をもって、卒業していただく――。それが、トライメント計画の目的であり、目標です」

・・・

　伊砂の説明が終わると、満席だった観客席から人がぞろぞろと退席していく。
　舞台袖にはイベントテントが設置され、退席者は次々にビニールに包まれた新しい制服を職員から受け取っていた。
　車椅子のことがあるため少し離れて翔とともにその様子を眺めてい

たあやめは、ふと声をあげた。
「あ、三国先生だ」
「ん？　どこどこ？」
あやめは、自分の視線の先を指差す。
髪の長い、色白の男性が立っていた。
「あそこに立っている灰色のコートを着た先生。担当が医療関係みたいで、面談のときも私を担当してくれた先生だったんです」
「へぇ、私は初めて見る先生だな」
「渋くてかっこいいですよね」
「ん、あやめの好みってオジサン系なの？」
「ええっ、そういう意味じゃないですから！」
あやめはぶんぶんと手を振る。
ホールに残った人は数えるほどになっていた。
「しかし……制服は20代後半の人にはちょっと辛いものがあるんじゃないかな……ある程度自由があるとはいえ」
「君島さんは絶対普通に似合いますよ」
「う―ん……まぁ、ブレザ―だったのが幸いだったかなぁ」
「確かに、セ―ラ―服だとちょっと厳しいですよね」
「さすがにね」
苦笑しながら、翔は言った。

制服はブレザーで、基本的には男子はズボン、女子は同じ柄のスカートだ。といってももちろん、女子がズボンでも問題はないし、その逆も選択できるようになっている。

「でも私、制服はちょっと楽しみです」

「お、そうなんだ？　あんまり着る機会なかったの？」

「ああいえ。そういう訳ではないんですが、なんとなく、ですね」

「そっか」

二人がまた列に視線を戻すと、残り三名となっていた。

そろそろいいだろう。翔はあやめの後ろに立ち、車椅子のブレーキを解除する。

「よし、それじゃあそろそろ行こうか」

「はい。お願いします」

多目的ホールから寮に戻ってくると、陽は落ちて月が空にのぼっていた。

翔はベッドに腰かけて、説明会で渡されたパンフレットを眺めていた。

ふと袂絣を列して、あやめを見やる。
あやめは日用品が入った鞄からシャンプーと洗顔料、タオルと寝間着を取り出していた。
「本当に手伝わなくて大丈夫？」
「はい。設備もしっかりしているので、一人でも大丈夫です」
必要なものを取り出すと、あやめは車椅子の上で身を起こして翔に向き直す。
「ですから、私のことは気にせず、君島さんは大浴場に行ってくださいね」
「うーん」
「君島さんは気をつかいすぎですよ。お風呂はプライベートな時間ですし、寂しくないから大丈夫です」
「私が寂しいんだよ――」
翔は唇を尖らせる。
「じゃあ、一緒に入りますか？」
「えっ、ほんと？」
「……すみません、冗談です」
「なーんだ」
翔は足を投げ出して手をベッドについた。
パンフレットが枕の上に零れ落ちる。

「しゃーない。星乃さんにフラれちゃったし、入ってきますかね」

「あとで大浴場、どんな感じだったか教えてください」

「なんだ、やっぱり気になるんじゃんー」

「内装が気になるだけです。ほらほら、早くいかないとお風呂閉まっちゃいますよ」

「んもうーっ」

翔が小さなバッグに風呂用具をつめる。

「何か買ってきてほしいものとか、ある？」

「いえ、大丈夫です」

「おっけー。じゃあ、行ってくるね」

「はい、いってらっしゃいです」

翔は廊下を歩き、玄関を開けて外へと出る。

口を閉じたまま微笑んで、あやめは翔を見送った。

「ふぁーー」

体を洗ってから湯船に浸かった翔は大きく息を吐いた。

大浴場。流し場はほとんど満員だった。

「ふい――」
頭を壁に預け、目を瞑る翔。
「おっさんですね」
声をかけられ、翔が目を開く。
「あら」
声をかけて来たのは織鶴。隣には文実が揃って立っていた。
「どもども」
文実は黙ったままで小さく会釈した。
「また会えましたね」
織鶴と文実は翔の隣に座る。
「だねー」
「星乃さんは？」
「フラれちゃったー」
「はい？　……ああ、そういうことですか」
織鶴ひとつ頷くと、大浴場に集まった人々に目を向ける。
「しかし、日常生活が普通に送れないというのは、本当大変でしょうねぇ……。ホールで見た限り車椅子の人、星乃さんだけみたいですし、本人もやりにくいんじゃないですかねぇ」
「そういう詮索とか勝手な思い込みこそ、迷惑でしょ」
「まあ、そうなんですけど。公社側もなんで受け入れたんだろうなっ

て……ああいや、こういう言い方もよくはないか」
「いろいろあるんでしょ。たぶん」
「色々ね……」
翔が横目で文実の顔をうかがい見ると、彼女は織鶴を睨むように観察していた。
そして、両手をぎゅっと水面で握り、ぎゅっと。
水流が真っ直ぐ、織鶴の顔に飛ぶ。
「ぶあっ」
織鶴がもろに受けてのけぞる。
「うわ、夏杞さんうまいね」
翔も文実に倣ってみるが、水は四方に散るだけでうまく飛ばなかった。
「できぬ」
「こうやって、隙間がないようにして……」
「ふむふむ……」
「おらっ」
文実の手元から、一直線に水流が飛んでいく。
「わぶっ。なぜ私を的にする！」
「えいっ」

翔の手からも水流が飛んだ。
「やめっ。おまえら子供かっ……！　ぶっ！　あ、わぶぶっ！」
二人の手元からぴゅっぴゅっと、水流が飛び続ける。
「くっ……おらあっ」
織鶴はしぶきを上げて翔に飛びかかり、わずかに膨らんだ胸に手を触れた。
「きゃっ。そ、それはっ、反則っ！」
「先輩、きゃっだって。かわいい―」
両手をわきわきとさせながら、織鶴が翔ににじるよる。
文実は、いつのまにか織鶴の背後に移動していた。
そして、背後から織鶴の乳房を容赦なく鷲掴む。
「ぎゃああああああ」
悲鳴を上げようようが暴れようが、文実は織鶴の乳房から手を離さない。
文実の胸が織鶴の背中に押しつけられて、楕円形に形を変えている。
「君島先輩」
じたばたと暴れる織鶴をよそに、文実が翔に声をかけた。
「あっ、ハイ」
「部屋番号を教えてください」

部屋番号を教えてください」

「あ、Bの125号室だよ」

「ひ、人のっ……胸を掴んだままで会話を、するなっ！　このっ……このっ！」

文実の手は離れない。

「じゃあ今度ご飯食べに行きますね」

「おお一、おいでおいで！」

「ひあぁぁっ！　ま、参った！　降参！　降参ーーー！」

織鶴が叫ぶと、文実は織鶴の胸を開放した。

織鶴は即座に、けろりと表情を戻す。

「私も先輩の部屋行きたかったんですよー！」

「切り替え早いな」

「それじゃあ星乃さんにも言っておく。私も部屋番号聞いておいていい？」

「うちはBの212号室ですね。多分同じ館です」

「わかった。じゃあ明日あたりまた連絡するよ一っ」

翔は、言い終えるのと同時に、水鉄砲を再び織鶴に発射する。

「バリアー！」

両腕を顔の前でクロスさせる織鶴。

ガラ空きになった乳房をまた掴む文実。

「ぎゃあああああああ!!」

・
・
・

「というわけで、二人が今度部屋に遊びに来たいって」

大浴場から戻った後。

話を聞いて、同じく湯上がりのあやめがくすくすと笑う。

「さっそく部屋に招く約束取りつけちゃうなんて、君島さんさすがですね」

「いやいや、最初に言い出したのは夏杞さんだから」

「夏杞さんが？」

あやめは、すこし目を見開いて言った。

「うん」

「そうなんだ……」

「で、りっちゃんからも同じく言われたって流れで」

「……そういえば、君島さんと河居さんって、どういう関係なんですか？」

「ん、りっちゃん　あ、可居さんは、言交のとき邪舌が一者で、夋

輩だったんだよね」
「なんの部活ですか？」
「漫画研究部」
「ほえー。今でも絵を描いたりするんですか？」
「まー、そうだね」
翔の目が少し泳ぐ。
「すごーい。見たいなーっ」
「あやー。まあ、そうだな……」
少しだけ逡巡しつつも、はあ、と翔が息を吐く。
そのまま後頭部をぽりぽりとかきながら言った。
「ちょっとこれは、りっちゃん以外のみんなには秘密にしてほしいんだけどね。同じ部屋にいる限り隠せないだろうから、星乃さんには明かしておきますと……」
翔は言葉を切る。
あやめは黙って、翔の言葉を待った。
「一応、私漫画家をやっていて、この島にいる間も原稿とかやるかもしれない、んだよね」
「えっ。すごい!!」
あやめが、胸の前で両手を合わせて驚く。

「えっ、えっ、漫画家さん……。すごいじゃないですか。あ、じゃあこの計画に参加したのも、その関係で……？」
「んーーー」
　右手で顎に触れながら、翔は言葉を探す。
「まあ、間違いではないというか……本当のところを言うと、打ち切りになった漫画を完成させに来た、っていうところかな」
「えっと……」
「ああ、あんまり気にしないで。なんというか……星乃さんみたいに立派な理由じゃないから、ちょっと恥ずかしくてさ」
「そんなこと……」
「本格的に漫画描き始めてから、あんまり他の人との接点ってなくてね。この年齢になってから、改めて人との出会いとか、学生時代の空気とかが恋しくなったというか……。あとは、漫画の勉強も、もっとしたいと思ったんだけど」
　あやめはうなずきながら、翔の話を聞いている。
「そんなに時間の余裕はなかったし、ありがたいことに仕事もなかなか途切れなくて、そういう時間がなかなか作れなくてね」
　翔は、椅子においてある自分の鞄に視線を投げながら続けた。
「あと、打ち切りになった漫画……私の勝手な想いだけど、完成させたくて。そのことが引っかかってて、次の仕事のアイデアも思い浮

たくて。――そのことが引っかかってて、次の仕事のアイデアも思い浮かばなくてさ。……だから、トライメント計画に申し込んだんだけど、通るとは正直思わなかったよ」
「そうだったんだ……」
「うん、そうだったんだ」
あやめは、聞いた話を反芻するように、話が終わったあとも何度かうなずいていた。
「ところでさ」
「？」
あやめはうなずくのをやめて翔を見た。
「星乃さんって、デザイン勉強してるの？」
「なっ」
あやめは咄嗟に自分の机を見た。
背表紙が見えないように裏返したデザインの本が視界に入る。
「ど、どうして？」
「いやいや、わかりますよー。あのタブレット、デザイナー向けの専用タブレットだし、本棚にはカラーチャートがあるし」
あやめの机を見やりながら、翔は言った。
あやめは身を縮めて俯く。
「プロは反則です……」

「いやいやいや。まあ、でも星乃さんも同じようなことしてるのがわかって、嬉しかった」
「プロの目が怖いので、この部屋の間に仕切りを置きましょう！」
「ええっ!?　私、デザインセンス皆無だから！　むしろ教えてもらいたいくらいで……！」
あやめの頬が、ほんのり赤く染まる。
「あ、あの。私手に職がないから……本当に始めたばかりで……すみません……」
「まぁまぁ、お互い気負わず勉強していこ一よ。そのための環境だしさっ」
翔はあやめに笑いかける。
あやめもつられて、翔に微笑み返していた。
「……そうですね。不束者ですがどうぞよろしくお願いします」
ぺこりと、あやめが頭を下げる。
「おおう、こちらこそ」
姿勢を正してあやめに向き直り、翔も頭を下げる。
「どうぞ、よろしくお願いします」
頭を下げた二人が、ほとんど同時に顔を上げた。
二人の目が、もう一度合い、どちらからともなく笑い出していた。
「それじゃあ、買ってきたお弁当食べて、今日はもう寝る準備しよっ

それじゃあ、買ってきたお弁当食べて、今日はもう寝る準備しようか」

「そうですね。今日一日、すごいボリュームだったのでちょっと疲れちゃいました」

「だよね。場所も、周りの人も、自分の行動ですら全部、まっさらだもんね」

「うん」

あやめがうなずく。

ほっとしたのか、翔は大きく伸びをして、その様子をあやめは黙って見つめた。

「ルームメイトが君島さんで、本当によかった」

あやめがぽつりと言ったその言葉は、翔に耳にも届いた。

翔は伸びをやめて、もう一度あやめに向き直った。

「私も。星乃さんで、よかったよ」

・
・
・

――零時過ぎ。

世界が寝静まった夜、虫の鳴く音と波の音が漂う。
寄せては返す波が、湿った砂浜についたばかりの足跡を消す。
寝間着姿のあやめが、砂浜を歩いていた。
海岸沿いに、足元を見ながら。
足が海水で濡れた。
歩を止めて、夜空を見上げる。
満月が空に浮かんでいた。
海の水面に写った星々は波に合わせて揺れている。
「お父さん、お母さん……どこにいるの……？」
静かな波音にも負けるほどの声で、あやめは言った。
「ここは、どこ？」
夜空に手を伸ばし、指の隙間から星空を見上げた。
流れ星がそこを伝う。
あやめは目を見開いた。
「私は――」

灯火のプレリュード

登校初日。
教室は、真新しい制服に身を包んだ学生でいっぱいになっていた。
壇上の端にはこのクラスを受け持つことになった三国の姿。
黒板には『自己紹介、名前、趣味、参加した理由、四月の目標』との記載。
すでにほとんどの生徒がそれを済ませ、残るは最後のひとり。
皆の視線が一様に、壇上に「座った」車椅子の生徒に注がれている。その視線の中には、翔や織鶴、文実のものも含まれていた。
「えっと、星乃あやめです。見ての通り車椅子で、ご迷惑をおかけすることもあるかもしれません。ただ、できれば授業などでは普通に接していただけるとありがたいです。趣味は……こんななりであれですけど、最近は外に出ること、ですね」
学生たちに戸惑いの色はない。揶揄するような声もなく、あやめはそのまま話を続ける。
「計画に参加した理由は、一般社会の中で自立した生活を送れるようになりたいと思ったからです。……えっと……四月の目標は……とり

あえずここでの生活に慣れていくこと、ですかね」
あやめは、そう言ったあとで何度か小さくうなずいた。
「どうぞ、よろしくお願いします」
教室にむかって、ぺこりと頭を下げる。
他の人に比べるとだいぶ短い自己紹介。それでも引っ込み思案なあやめにしては上手く喋れた方で、周囲もそれを汲んだか、ぱちぱちと拍手が送られる。

あやめは、俯いて拍手の音を少しだけ聞いた後、改めて顔を上げ、退席とともにもう一度ぺこりとお辞儀をした。
……そうして最後の一人が着席するのを見届けて、入れ替わりに三国が教壇の前に立つ。
「それでは、これからの大まかな流れを改めて説明しよう」
教壇においてあったタブレットを三国が手にとり掲げる。
「皆に支給されているこのタブレット。これが教科書であり、学び舎の根幹になると考えてもらいたい。先日伊砂が説明した通り、運営側としては、このタブレットに内包されたシステムの使用テストも兼ねている。授業で使う物はほぼこれだけとなるだろう。このタブレットを使用して基礎的な社会知識を学び、生きるうえでの選択肢を広げることが学習の主な目的となる」

三国がタブレットを教壇に戻す。
「とはいっても、この基礎的な社会知識についての授業は約三ヶ月ほどで終わる。逆に言えば、残りの自由時間こそ、君たちがこの計画に参加した意義を見出すべき時間となるだろう」
三国は言葉を切って、ゆっくりと教室を見回した。
「何度も聞いているとは思うが、一ヶ月ごとに行われる適性検査を通して、定期的な目標の最適化を個別に行っていく。その結果に基づき、みんなをサポートしていくことが我々公社にとっての一番の目的だと考えてもらいたい。私からの説明は以上だ。さて、基本的には各人が自分と向き合うことが計画の主旨だが、例外的に最初の一ヶ月間はグループ課題が多く行われる」
三国がその言葉を言い終えると、教室がにわかにざわめき立った。
三国が微かに笑みをうかべる。
「まずは自分たちのおかれている状況、すなわち、環境や仲間を知ることから始めようか。では、四人のグループを組んでほしい。内容はその後で伝える」
教室のざわめきが大きくなった。
グループ課題、四人組。いきなりのことに、いたるところで二人組――つまりルームメイト単位で生徒たちが話し合う。
朋がこちらのほうへ振り返り、声をかけた。

翔があやめのほうへ歩み寄り、声をかけた。
「早速きたねー」
「うん。結局、翔がいてくれて安心してしまう自分に笑っちゃう」
「そんな大げさな。何気にあやめは芯が強いから一人でも大丈夫だろうけど」
翔の言葉にあやめは苦笑いを浮かべる。
「うーん。どうだろう」
「ふふ。私りっちゃんと夏杞さんに声掛けてくるね」
「うん」
「他の人に捕まらないでよー」
そう言って、翔が教室を歩き始める。
織鶴の姿はすぐにわかり、隣には文実の姿も。当然のように声を掛けようとしたところで、クラスの中でさまざまなグループができ始める。
そんな大きな流れの中で、文実は手を振り背を向けて、ふらっと男子がいるグループへと溶け込んでいった。
……しばらくして、翔があやめのところに戻ってくる。
「あはは……ただいま」
翔に手を引かれているのは、織鶴と喜羽の二人だった。
「はぁ……」「はぁ……」

「ふつールームメイトとグループ組むよねぇ……」
「やっぱ嫌われてんのかな、俺……」
四つの机を繋ぎ合わせて、あやめと翔、それに織鶴と喜羽が向かい合って座っている。
　織鶴と喜羽が上半身をひねって視線を送っている先にも、同じように集まった四人のグループがあった。
織鶴のルームメイトである文実が、喜羽のルームメイトである八馬と楽しげに話をしてる。
「まぁ、あれは結果的に分断されちゃっただけだしさ……」
「私たちくらいでしょ、ルームメイトでグループが別なの」
織鶴は視線を喜羽に戻して言った。
「だろうな……」
　喜羽が力なく言ったあと、二人が揃ってため息をつく。
　小さな苦笑いを、翔とあやめは浮かべた。
「よし、じゃあさ。せっかく集まったことだし、こっちはこっちで自己紹介でもしようよ」
翔が手をポンと叩いて言った。

翔が手をぽんと叩いて言った。
織鶴と喜羽が翔に視線を移す。
「そうですね」
「だな」
あやめはふと、さっきまで織鶴の視線の先にいた文実をみやった。
文実があやめの視線に気付き、微笑んで軽く手を振ってくる。
あやめはぴくりと上半身を跳ねさせて、おずおずと小さく手を振り返した。
「それじゃ、とりあえず私から」
そんなあやめを横目に、翔は背筋を伸ばして姿勢を正した。
軽く咳払いをして翔が続ける。
「改めまして、君島翔です。趣味はゲームと旅行、かな。ここに来るまでは自営業だったり、フリーターだったり色々やってました。実は私からすると、もうみんな顔見知りだったりするんだよね。なので、短いけどこのくらいでいっか」
翔が三人を順番に見渡す。
「そんなカンジで、よろしく」
翔の自己紹介が終わると、織鶴が続く。
「えっと、河居織鶴です。趣味は君島先輩と同じく、ゲームとか旅行とかですね。あとはギターを弾いたり動画をみたり……そんなところ

です」
翔が織鶴を睨んだ。
織鶴は翔の視線には気付かない。
「先輩？」
喜羽がきょとんと声を上げた。
「あ」
織鶴と翔の目が合う。
「……趣味のレベルが私より先輩っていう意味です」
「ああ、なるほどな」
何度かうなずき、喜羽は納得した。
「えぇ……」
あやめが小さく声を上げる。
織鶴が翔の表情をうかがい見る。
翔はまだ織鶴を睨んでいた。
「っと……前は地元の旅行会社に勤務してました。なのでオススメの旅行先とか知りたければ多少は語れると思います」
「ってことは先輩である君島はもっと語れるって訳か」
「え？」
織鶴の視界の端で、翔がぶんぶんと首を横に振る。

「……君島さんはゲームがすごく上手くて、だから……、そういう先輩です」

「旅行は河居の方が先輩なのか？」

「たぶん、そうなります」

ぎこちない笑顔を浮かべて織鶴が言った。

「なるほどな」

喜羽はまた何度かうなずき、織鶴の言葉に納得した。

「じゃあ次……」

織鶴はそのまま、目の前の喜羽に目配せした。

「どうぞ」

喜羽は腕を組んだまま、片方の手で顎に触れた。

「喜羽正明だ。年は二十一。趣味はランニングやマラソン、あと旅行も好きだ」

淀みなく喋る喜羽。

力なく口を開いたまま聞く三人。

「へ一！　すご一い！　よろしくね！　じゃあ次星乃さんよろしく」

「えっ!?」

あやめがびくりと上半身を跳ねさせる。

「あはは……」

苦笑いを浮かべた翔が喜羽を見やる。

喜羽はすでに体ごとあやめの方を向き、あやめの言葉を待っていた。

「……」

三人の視線を受けて、あやめが口を開く。

「星乃あやめです。趣味は……部屋でのんびりすることです」

「ん？　さっき自己紹介では外に出ることって言ってなかったか」

「よく覚えてますね……えっと、どっちも好きなんです。外へ出ること自体が、他の人よりは貴重ですし」

「なるほどな」

「ここへ来る前は、主にリハビリ生活を送っていました」

車椅子のハンドリムに両手を添えて、あやめが言った。

翔と織鶴が言葉を挟まずにあやめを見ている。

「事故で脊髄を損傷して両足が動かせません。専門的に言うと、Ｌ２の不全麻痺です」

「旅行はいけないのか」

「ランニングとか登山とかツーリングは無理ですね」

「全部じゃないか！」

「はぁ……。そういうわけで、ご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします」

・・・

　各グループごとの自己紹介が落ち着いたところで、三国が再び教壇に立った。

「それでは、皆こちらに耳を貸してほしい」

　生徒たちが雑談を止めて三国を見る。

「早速だがグループ課題を出そう。先に伝えておくと、週明けには御雲島についての調査レポートを、同じグループで作成して提出してもらう。しばらくはこのグループで行動することが多くなるだろう。さて、今日の課題だが」

　三国、タブレットを操作し、画面をタッチする。

「グループメンバーでお互いの共通点を、最低三つ見つけ出すこと。これが今日の課題だ。まあ、自己紹介の延長のようなものだ。今それぞれのタブレットに提出用のテンプレートファイルを送信したから、自分以外の三人との共通点をそれぞれに記入して提出するように。無論、簡易な共通点を三つ出すだけなら簡単だが、今回のこれは互いのことをよく知る、というのが主旨だ。そのあたりも踏まえて、各自取り組

むように。以上だ」
　説明を終えて三国が壇上から降りると、再び各グループでの会話が活発化し始める。
「どうします、君島さん」
　織鶴から翔への、意味ありげな視線。
　意図を理解し、翔は小さく息を吐いた。
「んー、まぁいっか」
「やったー。やっぱり先輩は先輩ですよ」
　喜羽が二人のやりとりを怪訝な表情を浮かべて眺めていた。
「どういうことだ？」
「お互いの共通点。河居さんとは同じ高校の出身で」
「もっと言うと同じ部活で、君島さんは私の先輩にあたります」
「ああ、なるほどな」
　納得したように頷きながら喜羽が言った。
「　ちゃんとわかってるのかな……」
　喜羽の様子を見ていたあやめがポツリと呟く。
「あとは……同じゲームが趣味だし、旅行もそうだね。あげれば結構でてきそう」
「ですね」

顎に手をあてて共通点をあげていく翔に、織鶴がうなずきを返す。
喜羽は二人の様子をしばらく眺めてから、口を開いた。
「君島と河居が仲がいいから、河居のルームメイトは離れていったんじゃないか？」
「……………」
二人の視線が、机の上でぶつかる。
「喜羽くんはエアーリーディングができないからルームメイトが離れていったんじゃないですか？」
喜羽が腕を組んだまま織鶴の言葉を受けて、少し首を傾げる。
「待て。エアーリーディングってなんだ」
「そういうやつですよ」
「は？」
「二人ともルームメイトにフラれたという共通点が書けますね」
あやめが言うと、翔が笑った。
「たしかにっ」
織鶴はしかめっ面を浮かべながら、上半身を後ろにそらす。
「あとはなんか癪だけど、旅行好きってのと……あとはランニングが好きなのもですねー」
「なあ、エアーリーディングってなんなんだ」
喜羽が言い終わる前に、織鶴は両手で耳をふさいだ。

「私、今のところ皆と共通点が一個も思いつかない……」
あやめが言うと、翔が視線をあやめにうつした。
「んー。あやめとは同じカラーチャートを持ってるでしょ。使ってるシャンプーが同じ。あとは意外と寝坊助なところとか」
「あー、なるほど。でも私今までは寝坊助じゃなかったんだけどなぁ」
「環境の変化があるからかもね。まあいいや、共通点ってことにしとこう」
言いながら翔はタブレットを起動して、三国から送られたファイルの編集を始める。
織鶴があやめのほうに向き直った。
「カラーチャートって、なにかデザインとかやってるんですか？」
「えっと……まだ勉強を始めたばかりですが……」
「へー！　私もデザイン好きだよ。それじゃあ、ウェブ関連も勉強してる？」
「はい。一応」
「デザイナーズボードとか持ってたよね？」
「あ、持ってます」
「よしよしっ。私はこれで全員書けるかな」

翔に続き、織鶴が鼻歌まじりに自分のタブレットを操作し始める。
翔がタブレットを操作する手を止めて顔を上げた。
「残るはあやめと喜羽くんか……。二人とも、好きな食べ物は？」
「バナナだな」
「納豆ですかね」
一致しなかった意見に対し、喜羽が思ったことをそのまま告げる。
「納豆は嫌いだ」
「……わざわざありがとう」
「まぁまぁ」
翔が軽い調子で割って入る。
「私もバナナは毎日お世話になってるし、旅行も一緒、あと前に会ったとき喜羽くんの着る私服のブランドが私のと一緒だったね」
「先輩、相変わらずよく見てますねー」
「そうなのか？」
喜羽は目を丸くして言った。
「うん。これで三つ」
満足気にタブレットを眺める翔を、あやめがじっと見つめていた。
顔を上げた翔が、その視線に気付く。
「どした？」
「翔も納豆派になろう」

翔さ納豆汁は[illegible]、？」

「あ、納豆も好きだよ」

「！」

翔の返答に、あやめが喜羽に向けてニタリと笑う。

「？」

喜羽はその態度に、首をかしげるばかりだった。

・　・　・

「さて、時間だ」

時計を見てから三国が言った。

「ほとんどの者が終わっているようだが、一応提出期間は週明けまである。書けるなら三つ以上記入してもいい」

ふたたび教壇に立ち、三国は言葉を続ける。

「まだ早いが、今日はこれで解散だ。これから一年間の生活になるが、あっという間に過ぎてしまうだろう」

三国の言葉を黙って聞く学生たち。

三国はゆっくりと見渡した。

「まあ、とにかくこの計画を上手く利用することだ。……改めて、これから一年間、よろしく頼む」

・
・
・

教室を出て行くほとんどの生徒が同じ方向へ向かう。
その流れに、翔たちも混ざっていた。
車椅子を押す翔を挟むように、織鶴と喜羽が歩く。
喜羽とあやめは、いまだに共通点探しに四苦八苦しているようだった。
「じゃあ、好きなスポーツブランドは？　なにかないのか？」
「……わざとなの？」
「なにが？」
「なんでもなーい」
前途多難。
喜羽とのやりとりに呆れたのか、あやめはぷいっと前を向いてしまう。
その後ろでは、織鶴と喜羽。

この後[illegible]

「これ、絶対学食混みません？」
「うーん。やっぱりみんな考えることは一緒か一」
「初日ですしね。星乃さんもいるし、別の場所にしたほうがいいんじゃないですか？」
「そうしよっか」
教室がある建物から出ると、学生の多くが寮のほうへ進んでいた。
その中で翔たちが立ち止まる。
一歩前に出た翔が、三人に振り返った。
「私車とってくるから、適当に時間潰しててもらえると」
「いやあ、すみません。よろしくお願いしまっす」
手を振り、翔が走り去っていく。
その後ろ姿を見送ってから、あやめは学園から吐き出されていく学生の群れを眺めた。
「これ、全部購買に行く人なんですかね」
「でしょうね一。学園が始まってちょっとは人が分散すると思ったんですけどね」
「寮に戻って自炊してるやつもいるんじゃないか？」
「今日は初日ですし、みんな学食いったんじゃないですかね一」
「学食とか購買は、しばらく行きづらそうだな……」

そうつぶやいたあやめを、喜羽が見下ろす。

「今行ってみるか？　購買」

その声に振り返り、あやめは喜羽を見上げた。

「え？」

「さすがに覗くくらいはできるだろう」

「う━ん」

「行ってきたらいいんじゃないですか？　先輩とすれ違わないように、私ここで待ってますよ」

「いいんですか？」

「はい。それと、さくっと喜羽くんとの共通点見つけてきちゃってください」

「それは無理そう……」

あやめが苦笑いを浮かべて言った。

「なんでだ」

喜羽が無表情で返す。

あやめは車椅子のブレ━キを外し、ハンドリムに手をかける。

「おい。俺、押すぞ」

そう言って、喜羽はハンドルに手をかけた。

「　　　　　　」

あやめは喜羽を見上げる。

「　　　　　　」

「……なんだ、不満か？」
「いえ、じゃあ……お願いします」
「いってらっしゃーい」
織鶴がひらひらと手を振り、あやめと喜羽は人の波に飲まれていった。
売店がある棟が近づくにつれ、人の流れが詰まり始めた。
喜羽はその中をぐいぐいと進む。
周囲の視線が、喜羽の押す車椅子とそれに座るあやめに集まった。
「喜羽くん、ちょっと怖い」
「なに？　どういうことだ」
「無理に進まなくていいよ。人も多いし、あとちょっとスピードが速い……」
「ん、すまん……」
喜羽が車椅子を押す速度を緩める。
前だけを見ていた喜羽が、そこでようやく気が付いた。
「視線が痛いな」

「それは、しょうがないよ」
「ふむ、まあ、しょうがないか」
「……」
前方を眺めたまま、喜羽が動きを止める。
「なんだ、あれは」
視線の先。
建物の入り口に長い行列ができていた。
「うわ、すごいね」
「並ぶ時間はないし、売店の様子だけ見てみるか。隣を通っていこう」
車椅子のグリップを握り、再び前へ押し始める。
「え、いいよ。人多いし、もう戻ろう」
「見るだけだろ」
入口の行列を避けて、空いたスペースに車椅子を押し込む。
「あっ、喜羽くん！」
行列を作る人々を横目に見ながら、避けるように売り場近くへむかう。
車椅子のキャスターが段差に引っかかり、車体が大きく傾いた。
「っ！」
喜羽とあかりが、ほとんど同時に足を踏ん張る。

喜羽とあやめが、ほとんど同時に異変を感じ取る。
喜羽はとっさに車椅子を押さえたものの、あやめの体は急な停止でそのまま前方へと投げ出された。

「あ」

喜羽が車椅子を離し、あやめのほうへ手を伸ばしたがもう遅い。
虚空を切る喜羽の手。
あやめに為すすべはなく、そのまま派手に倒れ込んだ。

「っ」

「くそ！」

・　・　・

――喫茶店。
寮から車で十分ちょっと。翔が目をつけていたその昼食場所に着いても、あやめと喜羽の態度は不自然なままだった。
四人掛けのテーブル。織鶴が顔を動かさないまま、目線だけで左右に座るあやめと喜羽の表情を盗み見た。

「……うん。やっぱりなんかあったよね」

あやめと喜羽が、同時に顔をあげる。
あやめがわずかに微笑んで言った。
「ん、別になんでもないよ」
「なんでもなくない。俺が車椅子を転倒させて、星乃に怪我をさせた」
織鶴が目を丸くする。
翔は、喜羽が言い終わるのと同時、あやめを心配そうに見やった。
あやめは喜羽に平然と返す。
「いや、怪我してないから」
「だが、しそうになったし……」
「だから、大丈夫だったでしょ。行きたいって言ったの私だし、お願いしたのも私なんだから、喜羽くんは悪くないよ」
二人に挟まれた翔と織鶴の視線が、喜羽とあやめの間を行ったりきたりする。
「しかしだな……」
織鶴が両手を合わせて、乾いた音がテーブルで弾けた。
あやめと喜羽の会話が止まる。
三人の視線が織鶴に集まった。
「まぁあまぁあまぁ。せっかくオシャレな喫茶店もみつけたんですから、

優雅に、意識の高いトークで盛り」ないましょう」ょう」
　織鶴の言葉を聞いた翔が微笑み、芝居がかった動作で両手の指を組んだ。
「意識高いといえば、この間りっちゃん、寮のロビーで勉強してたよね」
「してましたとも！　人が集まってきてあわよくばフレンド申請をするつもりが誰もきませんでしたね」
「ガチ勢な空気がすごかったんだよきっと」
「というか、先輩も気付いてたんなら声かけてくださいよ！」
　今度はあやめと喜羽の視線が、翔と織鶴の間を右往左往する。
　織鶴が二人を交互に見つめて、大げさに告げた。
「二人もどうですか、ロビーで勉強会！」
　喜羽は、あご先を片手でこすりながら考えた。
「まぁ、悪くはないな」
　そう言った喜羽を、あやめは見ていた。
　三人の視線があやめに集まる。
　あやめはうつむいて膝元に視線を移した。
「私は、人の目があると集中できないから……」
　織鶴が翔をじっと見つめる。
「……えっ？　あ、私？　むりむり」

「なんでぇ！」
「いわせんなよ、恥ずかしい」
左手を頬に当て、右手を織鶴へ突き出しながら言った。
「別にエロマンガ描いてる訳でもな――」
テーブルの下で鈍い音がする。
翔が織鶴の足を蹴った音だった。
「夏杞さんは？」
「意識たけーって言われちゃいましたね」
あまりにも「らしい」返答に、あやめが小さく吹き出す。
「いいそう」
「あーあ。なつきちは男の元へ行ってしまうしなー」
「素直な子だよねぇ」
くすくすと笑いながら、翔が言った。
「今頃どうしてるんだろうなぁ」
言葉がテーブルの空間に飲み込まれて、少しばかりの静寂が訪れる。
「なあ、一つ相談していいか」
黙っていた喜羽が口を開いた。
三人の視線が喜羽に集まる。
「

「としたの？」

「ルームメイトの件でだな……」

「……」

「ほほう？　話されてみよ」

喜羽は咳払いをしてから続けた。

「その、どうしたら、ルームメイトと仲良くなれるだろうか」

夜。寝間着に着替えたあやめが、ベッドに横になっていた。

隣では、翔が机に広げたノートパソコンのキーボードを叩いている。

乱れないリズムの打鍵音が部屋に響く。

「かける――」

キーボードの音が止まった。

翔があやめのほうを振り返る。

「なした？」

「……。いつもありがとうね」

天井を眺めたまま、あやめが言った。

目をぱちくりとさせた翔が、あやめのほうに身を乗り出す。

「おお？　どしたどした―」
「いやさ。翔は本当いろいろ気を遣ってくれてるんだな―って」
「そうかな？」
「……今日さ、喜羽くんが車椅子を押してくれて、初めて怖いって思った。でも、あれが普通なんだよね。なんか、私いろいろと忘れてた……」
「……」
「私、この計画に参加して、なるべく一人で過ごそうって最初は考えてた。今こうやって普通に過ごせているのは、翔のおかげなんだよね」
「いやいや。逆に私は、あやめが迷惑してないか心配だったけど」
「ふふ。迷惑っていうか、なんか申し訳なくて。今日だってそう。喜羽くんが車椅子のことに詳しくなかったのは当然で、私が意識するべきだった。だから、ずっと申し訳なくって。今日、ずっとそればっかり考えてて」
「なるほど、ね」
　あやめが仰向けになったまま腕を組む。
「そしたらさ、喜羽くんがふつ―にルームメイトの相談始めてさ」
　翔は小さく苦笑いを浮かべた。
「[illegible]

「車椅子のことでずっと悩んでるようだったから申し訳ないなと思ってたら、そっちかよって思って」
「あぁー、それでちょっと不機嫌だったんだ」
「なんかごめんねー、心配かけちゃって。はーあ。私もバカだよね。喜羽くんとの共通点、一つはバカじゃダメかなあ」
冗談めいた口調に、翔が笑って返す。
「そこまであやめとの共通点が見つからないのも逆にすごいよね」
「完全に真逆なんだもん。ルームメイトさんも大変だろうなー」
「喜羽君のルームメイトさん、話を聞いてる限りだと邪険にされているというより……。純粋しがらみなく自由に過ごしたい人なんじゃないかなーって印象だったな」
「あ、そうそう」
「ん？」
翔は首をかしげて続きをうながす。
「今日、売店の近くで車椅子が倒れたとき、助けてくれたのが喜羽くんのルームメイトの八馬さんだったんだよね」
「へー！　そうだったんだ」
「なんか、不思議な雰囲気の人だった。確かにちょっと距離感は掴みにくい感じはあるのかも……」
床の一点を見つめながら、あやめが続ける。

「……ああ、やっぱりなんか悪いことしちゃったなあ。喜羽くん、気まずかっただろうなあ。あああ――」

　あやめがふたたび、ベッドに仰向けに倒れこむ。

　布団があやめの身をうけとめて柔らかい音をたてた。

「ふふ。大丈夫だよ。お互いにそう思ってるんだろうし、時間が経てば忘れるよ」

「なんか落ち込んでる顔思い出しちゃって、だめだ私、ああいうの……」

　つぶやくようにあやめが言う。

「喜羽くん、あれで正義感が強い人なんだろうな……」

「あやめは感受性豊かだなー。壁を作ろうとしてもうまくいかないタイプだ」

「……うーん」

「でもそっか、すると、喜羽くんとりっちゃんのルームメイトは同じグループになったんだねえ」

　顎に指を当てながら翔が言った。

「そうだね……夏杞さん、八馬さんと結構仲よさそうに話してた。八馬さんはきっといい人、うん」

　自分の言葉に、あやめが何度かうなずく。

それを見て、翔が微笑む。
あやめが小さくあくびをした。
翔が時計を見る。9時23分と表示されていた。
「そろそろ寝る？」
「……うん。なんか最近ほんとダメ」
「そういうときは、無理せず眠るといいよ」
翔は立ち上がり、あやめのベッドに歩み寄った。
掛け布団を持ち上げて、あやめの身体にかぶせる。
「ありがと。翔は？」
「私はもうちょっと起きてるよ」
「そっか」
あやめは目を閉じた。
「翔、おやすみ」
翔があやめの静かな声を聞いて微笑む。
「おやすみ、あやめ」

・
・
・

寮の廊下を抜けて、翔がロビーに出た。
視線の先には、勉強道具を広げて、手元のノートに視線を落としている織鶴の姿。
これみよがし、と揶揄するにはちょっとばかり真剣な表情だ。
「やほ、りっちゃん」
織鶴が顔をあげる。
「ありゃ、先輩。どーしたんですか？」
「もしかしたら今日もやってるのかなーと、覗きにまいりました」
「おもしろいものなんて、なにもないですよ」
「大丈夫。りっちゃんに会いにきただけだから」
「なんとっ。それは照れますなあ」
頬をぽりぽりとかきながら、織鶴が言った。
空いた椅子を引き、翔が座る。
「今はなんの勉強してたの？」
「んー、勉強というか、色々な国を調べていましたね」
翔が目を丸くする。
「ほう。どこか行きたい国があるの？」
「まずは軽く世界を周ってみようかなと。それから、カナダの友人のところに行くつもりでした」

「ほえ――」
感心したように声をあげて、翔はテーブルの本の一冊を見た。
東欧の食文化をとりあげている本だった。
「本当、グローバルな世の中になったよね」
「そうですね。翻訳機の性能が飛躍的に上がってから、海外旅行をする人もかなり増えました。海外で仕事をすることになったからまずは視察に、という人も結構多かったんですよね」
「海外かあ――」
「先輩はどうですか、海外」
「ん――。日本の安心安全な環境に慣れすぎて、前は全く想像もできなかったけど、確かに今となってはね。生活が安定して、貯金ができたら行ってみたいな――というのはあるかな」
「いいですよ、海外。確かにわからないことが多いのは怖いかもしれませんけど、私はそれがおもしろいなって。まさに異世界じゃないですか。子供のころみたいに全てが新鮮で、毎日が冒険になるんです。言葉が通じないからこそ、どうすれば伝わるのか真剣に考える。必要最低限な言葉を選ぼうとする。ある意味、それこそが本当の会話なんじゃないかって」
「……なるほど」
識鵡の話を聞いた翔が、自分の服のポケットを見てからそこに手を

織鶴の話を聞いた翔が、自分の服の[illegible]入れた。
　小さなノートを取り出し、挟んであったペンを外してメモを取る。
「なにしてるんですか？」
「りっちゃんのそれ、大事な感覚だなーと思って。漫画のネタをメモしてる」
「なるほどー、ってなんか恥ずかしいですね」
　ペンを戻し、ノートを閉じる。
　織鶴に向き直って、翔は微笑んだ。
「ここはネタの宝庫だね。それこそりっちゃんが言ったように、私にとってはここが異世界で、本当に色々な人を感じることができる。今までは、描くことだけが漫画を続ける方法だと思ってたけどさ。こうやってりっちゃんと話して、心に響いたことをメモにとることもまた、漫画を続けていることになるんだなって」
　織鶴は黙ったまま、翔の言葉にうなずく。
「……ちょっとは大人になれたのかなあ」
「二十歳ってすっごく大人なイメージでしたけど、実際は自分がどれだけ子供なのかを再認識するだけでしたね」
「ほんと。結構頑張って二十歳を迎えたつもりだったのに、また再スタートって感じで」

「そうですね一」
翔と織鶴がそろって窓の外に目を向ける。
しばらくして、織鶴は翔に視線を戻した。
「そういえば、大丈夫でした？」
「うん？」
「星乃さん、今日結構アウェィな感じでしたけど」
「ああ、うん。それなら大丈夫そう。そうだ、そのことでちょっとりっちゃんに相談があってさ」
「ん、なんですか？」
「喜羽くんとあやめ、まだお互いの共通点、一つも見つかってないでしょ」
「ですね」
織鶴がうんうんと、うなずきながら言った。
「だから明日の放課後に、お互いの共通点を見つける計画を立案したいのだ」

・
・
・

織鶴との話を終えて、翔が部屋へと戻る。
明かりの落ちた部屋。自動ドアで制御されたそこを抜けて、足音をたてずに寝室に向かう。
寝る前に、横目であやめのベッドを確認。
掛け布団がめくれていて、あやめの姿はなかった。
「あれ？」
ベッドの隅には車椅子があった。
あやめが降りたときのまま、そこにおかれている。
床にはスリッパ。だが、靴はなかった。
「んん？」
寝室を出て、他の部屋もみてまわる。
トイレにもあやめはいない。
「あやめー？」
さすがに気になり、翔は玄関の扉を開けて廊下に出た。
そのまま寮のエントランスまで来たが、あやめの姿は依然、そこにはない。
「どこいったんだろう……」
小さく首をかしげて考えてから、翔は部屋へと戻る。
部屋の扉がスライドして開く。

再び翔が玄関へ踏み入り廊下を進む。
寝室に入り、あやめのベッドに視線を移す。
あやめが、そこですやすやと眠っていた。
「あれっ」
床には靴とスリッパが揃えられていた。
翔が静かに近づいて、あやめの顔を覗き込む。
「あやめ？」
返事は小さい寝息のみ。
翔はあやめの前髪に軽くふれて、そのまま優しく頭を撫でる。
「…………」
振り返り、壁に掛けられた時計を見る。
時間を確認してから、翔は寝室を出ていった。
……翔がいなくなったあとで、あやめは寝返りをうつ。
音もなく、あやめの目がうっすらと開いた――。
「…………」

・
・
・

翌日。

今日も今日とてある程度の課題をこなし、放課後、四人は連れ立って、図書館へとやってきた。

來夢学園の図書館は、比較的大きかった。少なくとも「図書室」ではなく、ひとつの建物がまるまる専用のものになっている。

内容は文学書から専門書、新聞や雑誌などなど。

そのうち、マンガ、映画貸し出しと書かれたコーナーの前で四人が止まる。

喜羽とあやめのお互いの共通点を見つける計画。

つまり四人は、そのネタになりそうなものを図書館に探しに来たのだった。

「うおー結構あるじゃん」

「充実してるな」

翔が織鶴のほうに歩み寄る。

「さて、それじゃあ私たちで適当にチョイスしてくるので、二人はマンガコーナーでも見ていてくださいな」

「じゃあ、お願いします」

「ホラーはなしで」

喜羽が手を挙げて言った。

「フリかな？」

織鶴が不敵な笑みをうかべて言った。

「やめろよ。絶対だぞ」

「はいはい。じゃあ、また後程」

「ああ」

そう言って、翔とあやめが映画コーナーへと消えていく。

「……ええと、じゃあ私たちは」

「ん、そうだな」

残るあやめと喜羽が、マンガコーナーへ。

車椅子は、あやめがハンドリムを操って自分で押していた。

本棚にはマンガがぎっしりと並べられていた。

マンガコーナーの棚の間を、あやめが進んでいく。

左右の棚に交互に目をやり、色とりどりの背表紙を目で追う。

「上のほう見えないだろ」

あやめの後方を歩く喜羽が声をかけた。

「まあ、さすがにね」

「読みたいのがあったら取ってやるぞ

読みたいのがあったら取ってやるぞ」

「うーん、実は私そんなに漫画詳しくないんだよね……」

会話はそこで止まる。

車軸の回る微かな音も静かな図書館では聞き取ることができた。

「気になるタイトルとかないのか？」

「うーん」

ハンドリムを自分で押しながら、あやめが考える。

「喜羽くんはないの？　好きな本とか」

「そりゃ、もちろんある」

「へえ、それは？」

「ふむ、探してこよう」

「えっ。いいよ」

「いや、俺も気になるからな。少し待っててくれ」

喜羽は棚を見上げながら、本を探しに行く。

「タブレットで検索すればいいのに……」

喜羽の大きな背中を見送りながら、あやめが言った。

とはいえ、もう図書館で大声で呼びかけるほどのことでもない。

あやめはハンドリムにかけた手を押し込み、車椅子を進めていく。

と。ふと視線を上げると、その視線の先に『ピアノ・コンチェルト』というマンガがあった。

「……」
背表紙に指をかけて手に取る。
知っているマンガではない。ただ、なんとなく気になった。
表紙を開き、ぱらぱらをページを繰る。
『だから私は、音楽を続けるんだ！』
終盤のシーン。
笑顔の女の子の台詞が、あやめの目に入ってきた。
「……ん」
あやめの手が小刻みに震える。
なぜ手に取ったのだろう。明らかに気落ちした態度で、あやめはそのマンガを本棚へと戻した。
「おーい」
喜羽の抑え気味の声がして、あやめが顔をあげる。
「あった？」
「なかった」
「あら」
[illegible]ば、喜羽の答え[illegible]

それは、喜羽の落ち込みようは明らかだった。
額に片手で触れながら喜羽が言う。
「……かなしい」
「……なんてタイトルの漫画だったの？」
「親愛なるあなたへ、ってやつなんだがな」
「ふむ」
あやめが鞄からタブレットを取り出し、図書館の蔵書検索を呼び出す。
親愛なるあなたへ。
喜羽が口にしたマンガのタイトルを打ち込んだ。
「なにしてるんだ？」
「この図書館にあるものならタブレットで検索できるって先生言ってたじゃん」
「タブレットを持ってきてなかった」
「はあ。言えばいいのに」
あやめは画面を見たまま小さくため息をついた。
検索中。しばし待たされて、結果一覧。
「あった……ほんとだ、貸し出し中になってるね」
「ん、おいてはいるんだな」
「ふーん……」

喜羽が中腰になり、あやめの後ろから画面をのぞき込む。
「どんな内容の漫画なの？」
振り返ったあやめのすぐ近くに喜羽の顔があった。
「うわっ」
「ん、なんだ？」
喜羽が不思議そうな表情を浮かべて聞いた。
「近いよ」
「ああ」
喜羽の背筋が伸びて、元の姿勢に戻る。
「内容か……まあ、一言で表しづらいが、強いて言えば、恋愛漫画だろうか」
「え!?」
驚いたあやめが喜羽を見上げる。
「なんだ？」
「喜羽くん、恋愛漫画読むんだ……」
「失礼な奴だな」
むっとした喜羽の態度に、あやめは苦笑いで答える。
「喜羽くんには負けるよ……」
「その漫画、面白いんだが続きがずっと出てないんだ」
「そうなの

「そうなの？」
ふたたび、あやめが喜羽を見上げる。
「最近めっきり作者の名前を見なくなって俺は悲しい」
あやめはタブレットへ視線を移す。
『作者：早乙女はづき』
知らない作者名。
だが、その下、数ある「匿名」に紛れて、貸出履歴には見知った名前が記載されていた。
貸出履歴はプライバシ一の問題もあり、希望者は匿名記載が許されている。この「彼女」は、特にその申請をしていないということなのだろう。
「あ！」
「どうした？」
「これ……今借りてる人、私の知ってる人だ」
「ほう？　なら読ませてもらうといい。おすすめだ」
『貸出中：二上ユウ』
「やっぱり、同じ学園の人だったんだ……」

ひととおりマンガを見て回ったあやめと喜羽。

それに加えて映画コーナーで何かの映画を借りてきた翔と織鶴が、各々の収穫を手に四人で図書館の一角に集合する。

「さて」

翔と織鶴の手にはそれぞれ、映画のＤＶＤがひとつずつ。

翔はアニメのキャラクターが描かれたパッケージ、織鶴は黒い背景にやせ細った白い女性が描かれたおどろおどろしいパッケージを持っていた。

「君島のがいい」

「私も……」

「ほらーーー!!」

翔が勝ち誇ったようにパッケージを掲げる。

織鶴はほかの三人に自分のパッケージを突き出して叫んだ。

「君たち！　企画の趣旨がわかってないゾ！　お互いの共通点を見つけるなら、ホラーでしょ！　恐怖のつり橋の上でこそ共通点は生まれるんだよ！」

「生み出すんじゃなくて、見つけるんでしょーが！　アニメのほうが好きなキャラとかシーンとか語れるじゃん！　っていうか、つり橋効果ってそういう意味じゃないし！」

うんうん、とあやめがうなずく。
「そもそも、俺はホラーが苦手なんだが」
「そう、それよ！　星乃さんもホラー苦手だよね!?」
「私は別に、普通です」
「ほら!!　……エエ!?」
すまし顔で言ったあやめに、織鶴が面白いように目を丸くする。
「ほらほらりっちゃん、負けを認めたまえ」
「いやだ！　私は知ってるよ、先輩はホラーが苦手!!　私は恐怖する先輩がみたい!!」
「こ、こわくねーし。てて、適当言わないでほしーし」
どもりながら言う翔を、今度はあやめがじっと見つめる。
「じゃあ、じゃんけんでどっちかに決めましょう」
「おお！　いいね、ザ・公平！」
「ええーーー」「えぇーーーー」
織鶴は手に持っていたパッケージをあやめに差し出す。
「持っていてください」
「はい」
あやめがキリッとした表情で受け取る。
織鶴の背後でパッケージを大事そうに抱え、応援するような姿勢をみせるあやめ。

織鶴は両腕をクロスさせて握り、内側へ捻って手の中を覗く。
「ほらほら、先輩。いきますよっ」
翔がふらふらと前へ出て、右手を構えた。
「最初はグー！　ジャンケンポイ！」

「ウワーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」「ウワーーーーーーーーーーーーー！！！」
──男女の大絶叫がこだまする。
寮、翔のあやめの部屋にて。DVDプレーヤーに吸い込まれた映画の内容を前に、二人は全力の叫び声をあげていた。
当の翔と喜羽が、涙を浮かべながらひしと強く抱き合う。
「ちょ！」「ちょ！」
反射的に同時に上がった声は、あやめと織鶴。
まずはあやめが、翔の肩を掴んで自分のほうへ引き寄せる。
翔はあやめに引かれるまま、あやめの上半身に抱きついた。
あやめが翔の髪を撫でる。
「よしよし」
「、、、

「ひぇぇ……」
同じように、織鶴も喜羽を引きはがす。
すると喜羽も翔と同じように、織鶴に強く抱きついた。
「あれぇ⁉」
上半身にしがみついた喜羽を織鶴は突き放す。
「むりむりむり！　こういうの見てたら絶対霊が寄ってくるから！
楽しんでると寄ってくるから！！！」
「お前らは知らないんだよ！　夢の中で悪霊に取り憑かれ目覚めたら
金縛りになっている恐怖を‼」
「喜羽くんそういう話やめて！　今日眠れなくなるから‼」
「んもう……」
騒がしくなってきたところで、織鶴がカーテンを開ける。
差し込んだ光の中で、ぐったりと、屍のようになった翔と喜羽が並
んでいた。
翔はあやめに膝枕されながら、放心したように床の一点を見つめて
いた。
ゲッソリとした織鶴が振り返り、あやめを見る。
「見つけられましたか……共通点」
「え？……あっ」
織鶴の言葉を聞き、あやめがはっと口に手をやった。

「すっかり、忘れてました……」

「……がくっ」

ダウンした二人に続き、織鶴は膝をついて、ばたりと床に倒れこんだのだった。

・

・

・

それからしばし休憩した後、あやめが三国先生に用があるということで、今日は解散となった。

あやめが三人から離れ、部屋から出て学園へ戻ろうとする。

「あれ、私送っていくよ？」

翔の言葉に、あやめが首を振った。

「ううん、大丈夫。翔が出たら部屋の主いなくなっちゃうし」

「まあ、そうなんだけど」

じゃあ、また後で。

そんな言葉を言いかけたあやめに対し、喜羽が声を掛けた。

「あのさ」

あやめが喜羽を見上げる。
座っているあやめに対し、背の高い喜羽。喜羽もあやめを見下ろす形になる。
「よかったら、俺に任せてくれないか。送っていくよ」
「えっと……」
喜羽の視線から逃げるようにあやめは目を逸らす。
翔と織鶴は言葉を挟まずに、二人の様子を見守っていた。
「実は、昨日ルームメイトの八馬と少し話したんだ」
「あ、そうなの？」
喜羽が頷く。
「車椅子の扱い方を教えてくれた。八馬は介護経験があるらしくてな……」
「へえ、よかったじゃん！」
「うむ。みんなのおかげだ」
ふたたびあやめに視線をもどして、喜羽が続ける。
「すぐに上手くはできないだろうが、昨日みたいなことにはならないよう気を付ける。もちろん、危なかったら途中で止める。だから、もう一度挑戦させてもらえると、嬉しい」
あやめは黙ったまま、しばらく喜羽を見上げる。
喜羽も黙ってその視線を受けとめた。

「えっと、その……。……じゃあ、どうぞよろしくお願いします」
翔と織鶴が微笑んだ。
「じゃあ私たちは映画、二周目いっちゃいますか！　ねえ、先輩？」
織鶴が伸びをして、翔を見やりながら言った。
翔は織鶴のサイドテールを引っ張った。
「あだだだだだ！　だめ！　それ私の本体だから‼」
茶番劇に、あやめと喜羽が揃って笑う。
……それから翔と織鶴とは別れ、喜羽とあやめは学園の職員室へと向かうことになった。
寮のエントランス。喜羽はあやめの後ろに立ち、車椅子をゆっくりと押し始める。
「……っと。このくらいの速さでいいか？」
「うん、ありがとう」
ゆっくりと、ゆっくりと。
その手つきは当然のように不慣れながら、昨日とは違って彼なりに慎重を期していることが誰からも見て取れた。
「……八馬さんと話せたんだね」
「ん？　ああ。話自体はいつもしている」
「あれ、そうなの？」

「大体俺が一方的に話し続けているが、嫌な顔一つしない」
「……顔に出さないだけなんじゃ」
「そんなことはないと思うが」
あやめたちとは反対に学園から寮へ流れていく人々が、あやめと喜羽に視線を送りながら通り過ぎていく。
「星乃は、三国先生に何の用があるんだ？」
あやめを見下ろしながら喜羽が聞いた。
「ん、用っていうか、呼び出されてて。内容は私もわからない。でも多分、車椅子についてのことじゃないかな」
「ああ、なるほどな」
車椅子のタイヤが地面にわずかな跡をつけていく。
無数の桜の花弁が、まるで降り始めた雪のように地面にうっすらと積もっていた。
「喜羽くん。その、車椅子のこと、ありがとう」
「ん、なにがだ？」
「だから、なんていうか……、わざわざ勉強してくれたり、懲りずに声かけてくれたり……」
「ああ、それなら八馬に感謝してやってくれ。俺にはなにもできなかった」
「そんなことないよ。人に拒否されても、まだすぐに挑戦できるのよ

そんなことない。人は拒否されて、それでも人は挑戦できるのは
「喜羽くんのすごいところだと思うよ」
「……」
喜羽の口元は何度かもごもごと動いたが、言葉は出てこなかった。
「私にはたぶん……。いや、**絶対**無理だな」
「そうか？　俺は、一人でも頑張れてしまう星乃の強さが羨ましいよ」
「え？」
あやめが振り返り喜羽を見上げる。
「お前だってすごいってことだよ」
そう言って、喜羽があやめの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。
驚いたあやめが、やや前のめりになって抵抗する。
「ちょっ、なになにっ」
もう一度振り返ったあやめの頬は赤くなっていた。
「はは」
紅潮したあやめに睨まれながら、喜羽は笑った。
……結局。そんなこんなで、特に支障なく、あやめは学園まで送り届けられたのだった。

・
・
・

職員室、その隣の教室にて。
　あやめが到着した後。職員室だと狭くて話しにくいとのことで、三国はあやめを隣の教室へと促した。
教室に並んだ椅子の一つに三国は座る。
　あやめはそれに向き合うように車椅子で三国の前へ移動した。
「どうだ、最近は。始まったばかりではあるが、不都合はないか？」
「そう、ですね……むしろ便利すぎるくらいで、そんなに苦労はしていません」
　あやめの言葉に、三国が微笑む。
「そうか。人間関係はどうだ？」
「大丈夫です。なんだか、思っていたよりすごく……、普通に、やれています」
「ふむ。よかった」
　あやめの言葉にうなずいたあと、三国は机においたタブレットを操作した。
「星乃、手間をかけてすまないが、少しアンケートのようなものにこたえてほしい」

[illegible]しい」
「アンケートですか？」
「ああ。主に車椅子での寮生活に関するものだ。星乃限定になってしまうんだが、計画の一環として、車椅子での生活状況を上に報告することになっているんだ」
「ああ、それはもちろん、協力させてください」
「すまないな」
　三国はタブレットの画面をタッチしてから、あやめのほうに差し出した。
「このタブレットを使って答えていってほしい。回答は選択形式だから十五分もあれば終わるだろう」
「今始めていいですか？」
　あやめは差し出されたタブレットから三国に視線を移して言った。
「ああ、頼む」
「わかりました」
　車椅子の向きを調整して、改めてタブレットに視線を戻す。
　あやめの指がタブレットのディスプレイに触れると表示が次の画面に切り替わった。

「三国先生、アンケート、終わりました」
「ああ、ありがとう」
　事前の言葉通り、十五分ほどであやめは回答を終了し、タブレットを三国へと手渡した。
　それを受け取り、いくつかの操作をしてから三国はあやめに視線を移す。
「ふむ。うまくやれているようで安心した」
「そうですね、この計画のおかげだと思います」
「そうは言っても私たちにできることは限られている。この環境下でうまくやれているのは、星乃の力あってのことだろう」
「いえ、そんな」
　三国はタブレットの画面をスライドさせていく。
　あやめはその様子を黙って見上げていた。
「聞いていいものか分からないんですけど……。あの、どうして私は……この計画への参加を認められたんですか？」
「……どうしてまた、そんなことを？」
「その、私ってこの通り車椅子なので、周囲の環境を乱してしまうんじゃないかなって……。それは……この計画の意図には反するなと、思って」

思いまして……」
「そうか……なるほどな」
三国が近くの椅子を引いて、座った。
あやめと視線の高さが同じになる。
「質問に正直にこたえよう。星乃の受理については、上から指示があった。このトライメント計画は、ただ環境を用意し、生活予算を提供するだけではならない。教育はもちろん、医療分野のことも含めて様々な成果を期待され、支援を受けることで運営が成り立っている。つまり、星乃は医療の側面からの成果を期待され、受理された背景がある。もちろん、身体に不自由があれば誰でもいいというわけではないから、君自身に適性がある、というのは当然の前提としてね」
三国の説明に、あやめは何度か小さく頷く。
「なるほど、そうだったんですね」
「正直に言うと、我々公社側は星乃の参加には消極的だった。今となっては我々が浅慮だったというよりほかないが、孤立の可能性が高く、本人にとっても逆効果になると考えていたためだ。だが、この状況下でも星乃は自らの生活を確立できている。私たちの考えの上をいったというわけだ」
「……えっと、これからも頑張ります」
「それもいいが、私たちに頼る部分があれば遠慮なく言ってほしい。

「それも星乃の役目であると考えてもらいたい」
「はい、わかりました。ありがとうございます」
あやめがぺこりと頭を下げる。
三国はその様子に微笑んで返して、立ち上がった。
「改めて、協力に感謝する。週末はゆっくり過ごしてほしい」
「こちらこそ、ありがとうございました」
用事が終了し、三国が出口へと向かう。
その途中、三国が一度だけ振り返った。
「そうだ、最近体調が悪かったり、体の変化を感じたことはないか？」
「えっと……特には、ないと思います」
「そうか」
「あ、これはまあ、私の生活習慣の問題だと思いますが……」
三国があやめの言葉の続きを待つ。
「最近は眠気がなかなかとれない、くらいですね」
「ふむ。環境の変化もあるだろうが、あまり酷いようなら私に言いなさい。少しなら診察をしてみよう」
「はい、ありがとうございます」
「それでは」
今度こそ、三国が職員室へと戻っていった。

今度こそ、三国が職員室へと戻っていく。

扉が閉まるのを見送ってから、あやめも寮のほうに車椅子を進めた。

西日がさして赤く照らされた廊下を車椅子が進む。

昔を思い出す、どこかノスタルジックな廊下の風景。

車椅子の駆動音だけが響くそこに、ふと、遠くからピアノの旋律が流れてくることにあやめが気付く。

「……」

学園には、たしか音楽室があった。きっと誰かが演奏しているのだろう。

少しだけその音をあやめは耳に留めて、引き続き車椅子を進める。

突き当たりには、車椅子用のエレベーター。ボタンを押して到着を待つ。すぐにやってきて扉が開くと、中には見知った顔が乗っていた。

喜羽だった。

「あっ」

「お」

「エレベーターを出ようとした喜羽が中に戻り、扉を押さえる。
「良かった、入れ違いにならなくて」
「喜羽くん、寮に戻ってなかったんだね」
「ああ、河居にホラー映画を返してくるように言われたからな。図書館に行っていた」
「あ、なるほど」
あやめがエレベーターに乗り込む。
ほどなく、エレベーターは一階へとたどり着いた。
「車椅子、押すか？」
「ん、お願いしようかな」
喜羽も笑みを浮かべて、車椅子のグリップを握った。
……二人は通学路を通り、学園側から寮に向かっていく。
ピアノの音はエレベーターを降りて、学園の入り口を過ぎてもなお聞こえていた。
遠ざかるにつれ、徐々に小さくなっていく。
「なんか、悲しい感じのメロディだな」
「うん、ずっと鳴ってるね」
二人は進みながら、メロディに耳をかたむける。
「どういう気持ちで弾いてるんだろうな」
「うん、なんだか色んな感情を感じるよね

……うん。……なんだか色々な感情を感じるよね」

「俺には音楽はよくわからんけどな」

「ふふ。たしかに喜羽くんがクラシックとか聞いてたら気持ち悪いかも」

くすくすと笑うあやめを見下ろして喜羽が言う。

「つくづく失礼な奴だな、お前は」

そう言ってから、喜羽は前を向いた。

「音痴だからあんまり好きじゃないんだよ、音楽は」

「へぇ、そうなんだ」

桜の花びらがあやめの膝に落ちてきた。

あやめはその花びらを手に取り、見つめる。

「あ」

「ん？　どうした？」

突然何かに気付いたかのようなあやめ。

「共通点」

「共通点？」

「喜羽くんとの共通点、一個みつけた」

「ほう？」

あやめは前を向いて、言葉を続ける。

「私も、音楽はあんまり好きじゃないっぽい」

「へー。意外だな。星乃は逆にクラシックとか聞いてそうじゃないか。お前も音痴なのか？」
「音痴じゃないですー」
唇を尖らせてあやめが言った。
「じゃあ、歌ってみろよ」
「は？　絶対やだ」
「やっぱり音痴じゃないか」
ふっと小さく笑って喜羽が言った。
「うわ、むかつく」
あやめが軽い調子で毒づく。
すると、今度は喜羽が何かに気付いたように口を開いた。
「おれも見つけたぞ、共通点」
「え？　うそ」
喜羽の視線を追って、あやめも海岸のほうに目をやる。
スポーツウエアを着てジョギングしている人たちがあやめの目に入った。
あやめが喜羽を見上げる。
喜羽もあやめを見下ろし、そのまま車椅子のアームレストを叩いた。

「これだよ、これ」
喜羽の叩いたところを眺めるあやめ。
「……車椅子？」
「ああ」
あやめはもう一度、喜羽を見上げる。
「どういうこと？」
喜羽は自分の左胸あたりに指を触れた。
「俺、ペースメーカーがここに入ってるんだよ」
「え？」
「道具の補助が必要って意味では、共通点じゃないか？」
「ペースメーカー……」
あやめがゆっくりと喜羽を見上げ、目を見つめる。
「……喜羽くん、ランニングとかマラソン好きっていってたじゃん」
「ん、言ったな」
「なんで」
「いや、なんでって言われてもな……」
喜羽は空を仰いだ。
しばらくそうした後、あやめを再び見下ろして。
「まあ、好きだからとしか言えん」
「…………」

喜羽から視線を外し、あやめは前を見る。
「そっか」
「ああ、そうだ」
「……」
海岸から視線を戻し、喜羽が再び車椅子を押し始める。
しばらくして、あやめが閉ざしていた口を開く。
「喜羽くんならきっと気にしないだろうから、言うんだけどさ」
「ん？」
「なんていうか、聞いても気にしないでほしいんだけどさ」
「ふむ」
「……」
そこまで言って、しばし沈黙が続く。
「言いづらいことなら、無理に言わなくてもいいぞ」
「……ううん。別に、大したことじゃないんだけど、なんていうか……」
「うん」
「その……」
あやめの両手が組まれ、強く握りこまれる。
「私、事故にあって、脊髄を損傷して、車椅子生活になったんだけど

「さ」
「ああ」
車椅子のタイヤが砂利を踏む音と、海岸から届く波の音が重なり合う中で。
消え去りそうな、けれどもはっきりとした声で、あやめが告げた。
「私、事故の前の記憶が、ないんだ――」

あやめを寮のエントランスに送り届けたところで、喜羽は自分の部屋へと向かっていった。
すでにだいぶ遅い時間。あやめは再び自分の手でハンドリムを握り、翔の待つ部屋へ。
部屋の扉がスライドして開く。中の廊下にさしかかったところで、寝室から翔が走ってきた。
「わあああああ、あやめ―――――」
叫びながら、翔があやめにしがみつく。
「ええっ？　ど、どうしたの、翔っ」
顔をあげた翔の目が潤んでいた。
「怖かった……」

「へ？」
あやめは目を丸くして部屋を眺める。
部屋には、先ほど図書館で借りてきたホラーＤＶＤのパッケージが転がっていた。
「一人で怖かったよおおおおおっ」
「えええー……」

・
・
・

寝間着に着替えたあやめがベッドに腰掛ける。
その隣にぴったりと身を寄せた翔が座っていた。
「だいぶ落ち着いた。けど、今日は一緒に寝ようね、あやめ」
「う、うん」
あやめは苦笑いを浮かべてこたえた。
翔が安心したように、ふわっと笑う。
「……ふむ」
あやめはちらりと、翔の机を見た。

「翔、突然なんだけどさ」
「え、うん、なになに。そういう雰囲気だすのやめて怖い」
「あ、うん。えっと、その」
翔の様子に少し笑いそうになるが、内容が内容だけに、あやめが複雑に言い淀む。
少しだけ机と翔の間を視線が往復した後、満を持して尋ねた。
「早乙女はづきさん？」
「はい。……えっ？」
翔の笑顔がだんだん溶けていき、真顔になり、最後に呆けたような顔になった。
その表情の変化を、あやめはじっと見つめていた。
「えええええええええええええええ!?」
一際大きな叫び声をあげて、翔がベッドから転げ落ちる。
尻餅をついたまま勢いよく後ずさりして、自分のベッドに背中をつけた。
わなわなと、口が震える。
「なにそれええ!!　今までで一番怖い！！！！」
あやめは吹き出した。
「あはは、やっぱりそうなんだ」
「待って待って!!　なんで??　編集者の霊が乗り移った？？？　それ

とも霊視？？？？」

「いやいや」

苦笑しながらあやめが首を横に振る。

「私もちょっと自信なかったんだけどね、今日図書館で喜羽くんの好きな漫画を聞いてさ。それが、『親愛なるあなたへ』って漫画で」

あやめの言葉を聞きながら、翔は顔面を両手で覆った。

覆い尽くした。

「いっそ殺してください」

「いや、なにもそんなに……」

「ちょっとバレるの早すぎて心の準備ができてなさ過ぎて心臓がばくばくしてる」

両手の向こうでもごもごと口早に言った。

「か、翔……？」

「いや、でもそれだけじゃわからないよね、もしかして封印した私の箱の鍵を解いたの、そうなのあやめ……！」

「いや、翔の絵は見てたから絵柄はよく知っていたのと、喜羽くんが新刊がでなくて悲しいって言ってたから、もしかしてと思って」

翔は顔を隠していた両手をといて、体育座りをした。

「もう、お嫁にいけない」

呟くように翔は言った。
対してあやめは、翔のそんな様子がおかしくてとうとう噴き出したのだった。

・・・

他に誰もいない職員室で、三国のタイピングの音だけが響く。
なんということはない、予定通りの事務作業。マウスをクリックし、手元にあるお茶を手に取り、口へ運んだ。
「……」
お茶を飲み下し、一息ついた三国の背後に、ひとりの影が忍び寄る。
そして三国の肩を叩いた。
「わっ」
「！」
三国の体がビクリと跳ねる。そのあとで、静かに振り返った。
「……」
立っていたのは、尹沙だった。

三国は目を細め、無言で伊砂を睨む。
「あらこわい」
隣のデスクの椅子を引いて伊砂が座った。
手に持っていたビニール袋を机へ置き、中から小さいパフェと白玉クリームぜんざいを取り出す。
プラスチックのスプーンを添えて、白玉クリームぜんざいを三国の机のほうに差し出した。
「どうぞ」
「……」
三国は目の前におかれたカップをしばらく眺めたあと、無言のままそれを受け取った。
「最近、遅くまでなんの作業をされてるんです？」
「報告のチェックと、収集データの管理だ」
ぜんざいのふたを開けて、三国がそれを口に運ぶ。
「その作業、外部管理の部署に委託できないんですか」
「上が仕組みを理解できていないから、どうしてもこの時期は仕事が重なる。皆、文句も言わずよくやっているよ」
「……なるほど」
「お前のところはずいぶんと固い課題を出したんだな」

「それがなにか？」

「……いや。相変わらずだなと思ってな」

「どうせ、私はカタブツですから」

「ふん」

三国と同様、伊砂もまた別のクラスを担当している「先生」だ。全体的な方向性以外は各担任にある程度裁量が任されていて、三国の「三つの共通点」に代わり、伊砂はもう少し固い課題を出していた。

その内容は、ざっくりいうと現代社会と先端技術の関係性、および社会に与える影響について。小論文でも書かせる気か、と三国が小言を漏らすのも当然ではあった。

と、そんな話をしているうちに、三国のタブレットが点滅した。

「……揃ったか」

「課題ですか？」

「ああ」

三国がタブレットを手に取る。

ファイル受信の通知。提出者名は、星乃あやめ。

「彼女ですか」

「そうだな」

「星乃さん、どうですか」

学生さんですか？」
三国の操作で、画面が少しずつスライドしていく。
『共通点：喜羽正明くん』
『１：音楽が苦手』
『２：日常生活を補助器具で補っている』
「ああ、実に興味深いよ」
「興味深い？」
三国が顔を上げて、伊砂を振り返る。
「よく頑張っている」
「そうですか、それはよかった」
画面に視線を戻し、三国はスライドしていた手を止める。
しばらく画面を見つめてから、タブレットを机におきなおす。
「さて、課題も揃ったことだし、さすがに帰るか」
椅子を引いて、三国が伸びをする。
立ち上がり、パソコンの電源を落とす。
伊砂も三国にならって立ち上がり、机のゴミを片付けた。
「伊砂、帰りは車に乗せてくれ」
「はい？　ご自分の車は？」
「今日は歩きだったんだよ」
「……はあ、仕方ないですね」

三国と伊砂はそれぞれ鞄を手にして、職員室の入り口に向かった。
職員室の明りが消え、扉が閉まり、鍵がかかる音がした。
静まりかえった職員室で、三国の机のタブレットの画面が光っていた。

『３：漫画、親愛なるあなたへが好き』

タブレットの画面が自動で落ち、本日の業務は終了となった。

・　・　・

水平線の果てに、朝陽の気配が立ちこめる。
暗がりの空と海の境界線に、橙色のグラデーションが浮かび上がる。
──とある孤島。一本の桜の木と、一件の小さな家。
見渡す限りの草原を、白い少女──ユウが歩いていた。
風に吹かれた白い髪が空へなびき、桜の花びらが舞い上がる。
その絵画のような光景を前に、ひとりの女性が立っていた。
名前を、二上響子（ふたかみきょうこ）。

ユウの「母親」にあたる女性だ。
「響子、戻りました」
「ああ、おかえり。アルファ」
ユウはそのまま、二上の隣に立った。
視線は揃って、「本島」へ。
「どうだった？」
「あなたの言うように、独立した信号を持っています」
「やっぱりそうか」
ユウの言葉を聞いた二上が空を仰ぐ。
朝陽の光が重たい暗闇を溶かすように、空を照らし始めていた。
「おかげで、確証がとれた」
空を見上げたまま二上は言った。
ユウが二上の横顔を見る。
「それでは……」
「うん、いけるよ」
風が強く吹く。
舞い上がった花びらが差し込んだ陽に照らされて白く輝いた。
二上は視線を水平線まで落とし、ゆっくり登る太陽をとらえ、目を細めた。
「それじゃあ、始めようか。私たちのトライメント計画を」

TrymenT
—今を変えたいと願うあなたへ—
I

2020年5月30日 発行

脚色
えある

原作
TrymenT

カバーイラスト
雫将維・クロノミツキ

本文イラスト
雫将維・クロノミツキ・mocha

カバーデザイン
shotaro ichinose

公式サイト
re-tryment.com

公式Twitter
@TrymenT_PJ

発行
TrymenT

本書の無断複製、無断転載、無断アップロードを固く禁じます。

©TrymenT AlL RightS ReserveD.

TrymenT

目次

登場人物名簿
今を変えたいと願うあなたへ
灯火のプレリュード